

# 小説『劉志丹』事件の歴史的背景

石川 禎 浩

はじめに——小説『劉志丹』事件とは……………	153
Ⅰ 事件のあらまし……………	155
Ⅱ 史実の世界……………	164
Ⅲ 歴史認識の世界……………	174
Ⅳ 小説の世界……………	186
おわりに——小説『劉志丹』再度の扼殺……………	199

## はじめに——小説『劉志丹』事件とは

社会主義中国における文学・芸術は、常に政治に翻弄され、政治運動の道具にされてきたと言われる。人民共和国時代のそれら文化活動への政治（運動）の干渉の例は、映画「武訓伝」批判、胡風批判など枚挙にいとまがないが、1962年に起こった小説『劉志丹』事件は、この小説が「反党小説」と断罪され、その結果、小説執筆の黒幕とされた習仲勳（当時、中共中央委員、国務院副総理）らが「反党集団」と認定されて失脚するという一大政治事件にまで発展したものである。この事件に連座して迫害を受けた者は1万を越え、文化大革命終結までに200人以上が迫害死、100人以上が深刻な精神・身体障害者となったと言われる<sup>(1)</sup>。人民共和国における最大の「文字の獄」のひとつと呼ばれる所以である。

また、この小説は、中共8期10中全会（1962年）でこの事件に言及した毛沢東が、「小説を利用して反党活動をおこなうというのは、一大発明である。……およそある政権を覆そうとすれば、まず世論を作り出さなければならず、まずイデオロギー面での工作をおこなわなければならないのが常である。革命であろうと反革命であろうと、まずイデオロギーをやらうとする」<sup>(2)</sup> という講話をしたことでも知られている。この言葉がその後、

小説や文芸といった創作活動への迫害の格好のお墨付きとされたことも、また周知のことさらに属そう。いわば、小説『劉志丹』事件は、文革時期に最高潮に達する文学・文芸の圧殺を予告したものと言えるのである。

筆者がこの事件に注目するのは、これが文革時期以前における政治による文学への不当な干渉の先蹤となったからだけではない。実は、文革終結後の1979年に、この小説と作者は名誉回復され、作者の李建彤は扼殺されて日の目を見なかった小説『劉志丹』の上巻を同年に発表するだけでなく、大幅に手を加えて書き直した新版『劉志丹』（全3巻）を1984年から翌年にかけて出版したのだが、その新版は出版後まもなく発行停止処分を受けるに至ったのだ。つまり、小説『劉志丹』は再度禁書となったのである。それゆえ、4万部あまりが刷られた新版『劉志丹』は、現在でも中国国内では容易に読むことのできない状態にある。

名誉回復されたはずの小説、それも陝西の革命運動の英雄たる劉志丹を描いた歴史小説が、なぜ再度禁書にされなければならなかったのか。また、この小説には、部分的に発表された1962年版（すわなち事件を引き起こしたもの）と名誉回復後に出版された1979年版（上巻のみ刊行）、そして大幅な書き直しを経た1984-85年版（3巻本）があるわけだが、それらにはどのような変化があり、その変化は作者のどのような体験や意図を反映したものなのか。そして、ポスト文革時期の文学作品（とりわけ共産党の革命や英雄を描く作品）は、いわゆる政治との関わりをどのように再定位されて今日に至っているのか。これらの問題点を解決することは、この小説を単に文学作品として分析する以上のことを我々に求めている。本稿が小説『劉志丹』事件の「歴史的背景」と銘打つ理由はひとえにそこにある。

小説『劉志丹』事件については、それが人民共和国における典型的な「文字の獄」であるがゆえに、1980年代から中国国外で、関係資料が公開された近年においては中国国内でも、いくつかの研究が世に問われている<sup>(3)</sup>。ただし、これら既往の研究は、時期的、資料的制約もあって、この小説と事件の背景——すなわち、1930年代の陝西北部での劉志丹をとりまく共産党の革命運動の実際と激しい内部抗争、それに起因する関係者間の反目——について、十分な検討を欠くうらみがある。実は、そうした歴史的背景こそが、小説『劉志丹』の作者をして、この小説の取材、執筆に精力を傾注せしめた原因であり、他方で一小説には不似合いなほどの激しい反発が一部の共産党指導者から寄せられた理由であり、さらにはこの小説の新版が発禁となるほどの内容に書き直された遠因なのである。

その意味で本稿にとって幸いなのは、小説の作者李建彤（女性、1919-2005）が生前に書き残した『劉志丹』事件についての覚え書きが、2007年に香港で刊行されたことであ

る<sup>(4)</sup>。すなわち、『劉志丹』の作者にして、事件の当事者でもある李建彤の証言が得られたことによって、事件の顛末はもちろんのこと、小説に仮名で登場する陝西の革命家たちの実名との比定がようやく可能となり、この小説の全貌を我々はようやく理解することができるようになったのである。

そして、本稿が小説『劉志丹』に注目する今ひとつの理由は、1986年はじめに小説『劉志丹』の新版が発行停止の処分を受けたさい、時の中共総書記・胡耀邦が、その処分に関連して重要な指示——党史にかかわる文学伝記における史実記述や人物にかんする描写は、芸術の是非の問題ではなく、政治の是非の問題であり、たとえ文学・芸術作品であっても、党史の史実への歪曲は許されない——を与えていたことである。すなわち、この指示によって、中共の革命史に素材をとる歴史小説や伝記小説は、たとえそれが創作であっても、党の掲げる史実と異なる歴史像を描き、革命指導者のイメージを損なうようなことを行ってはならないという新たなるタガが芸術にたいしてはめられたのであった。むろん、この指示は今日も有効のはずである。されば、小説『劉志丹』は、いわゆる改革・開放政策後の中国文芸が今日なお背負わされている十字架を知る上で、きわめて重要な事例を提供してくれると言えよう。

## I 事件のあらまし

---

### 1 小説『劉志丹』執筆の経緯

李建彤の小説『劉志丹』は、1920年代後半から1930年代にかけて、陝西省北部で活躍した中共の革命家・劉志丹（1903-1936）の波乱の半生をつづった長編伝記小説である。

革命家・劉志丹の名は、中国では知らぬ者のないほどであり、とりわけ生地である陝西省では、今日でもその声望は絶大と言ってよい。その出身地である陝西省保安県が1936年以来、かれの偉業を称えるために「志丹県」と改称されていることに、地元での人気の一端をうかがうことができよう。また、劉志丹の名は、かの『中国の赤い星』において「現代のロビン・フッド」というあだ名とともにその事績が紹介された<sup>(5)</sup> ことによって、我々国外の者にも比較的なじみ深いものとなっているはずである。辺鄙で貧しい陝西北部の実情に即した自在な革命方針と高潔な人柄で地元民衆に愛された若き革命家の生と死を、生き生きと描いた歴史小説、それが『劉志丹』である。

小説『劉志丹』誕生の発端は1950年代半ばにさかのぼる。当時、北京の工人出版社は中共の中央宣伝部の方針のもと、劉志丹をふくむ革命烈士の伝記、回想録の出版計画を進めていた。そして、劉志丹の伝記執筆者として白羽の矢が立ったのが、李建彤であった<sup>(6)</sup>。

当時、中国地質科学院党委員会副書記の職にあった李建彤が劉志丹伝の執筆者として選ばれたのには、彼女の経歴と姻戚関係が大きくあずかっていた。すなわち、彼女の夫（劉景範1910-1990、1946年に結婚）は劉志丹の実弟であり、兄に従って陝北での革命運動に奔走した中共黨員だったのである。彼女のこの特殊な立場は、劉志丹伝のための資料集めや関係者への聞き取りに大きな利点となっただけでなく、義理の兄にあたる劉志丹の苦難の生涯は後世にしっかりと伝えなければならないという強い義務感を彼女に与えることにつながった。また、彼女は専業の作家でこそなかったが、かつて延安の魯迅芸術学院に学んだ経歴を持ち、『劉志丹在橋山』（陝西人民出版社、1958年）に小篇を寄稿したり、「劉志丹太白収槍」（『星火燎原』人民文学出版社、1958年）といった文章を書いたりしたことがあったから、出版社から見ても、彼女は劉志丹伝を書くのにうってつけの人物だったのである。

1956年に出版社からの打診を受けた当初、李建彤は逡巡したようである。彼女自身の述べるところから従えば、

わたしには引き受ける勇気がなかった。延安にいた時、わたしは人々が劉志丹同志の英雄的事跡について語るのを聞いたことがあるし、いくらか材料を集めたこともあるが、1956年には書く決心がつかなかった。それはテーマがあまりに大きすぎたし、思想や芸術の面での準備も整っておらず、不十分に終わることを恐れたからである。とりわけ、劉志丹には極めて複雑な闘争の歴史が関わっており、たとえ小説を書くにしても、そうした事件に触れないわけにはいかない。そうした事件を避けてしまっただけは、劉志丹を書いたことにはならないのである。<sup>(7)</sup>

というのがその理由であった。ここで彼女が言及している劉志丹の「極めて複雑な闘争の歴史」こそは、小説『劉志丹』事件の歴史的背景であり、次章において詳述することにするが、この1956年という時点でその複雑な歴史に触れることがもたらしかねない厄災については、あらかじめ若干の説明をしておくべきであろう。それは高崗という中共指導者の失脚にまつわる暗雲である。

高崗（1905-1954）は、劉志丹と同じく陝北出身の中共黨員であり、1930年代にあっては、劉志丹の片腕として陝北革命運動を指導した人物である。1936年の劉志丹の死後は、いわば劉の政治資本・人脈を引き継ぐ形で中共指導部に重きをなし、人民共和国内部には党内有数の実力者にのし上がっていた。そのかれが、いわゆる「高崗・饒漱石反党集団」を形成して党篡奪を企てたとして失脚・自殺したのが1954年のことである。人民共和国内部

最初期の大規模なこの「党内陰謀事件」は、その真相になお多くの謎を含んだまま今日に至っている<sup>(8)</sup>が、その余波として、かれや劉志丹と共に革命闘争を戦い抜いた陝北出身の中共幹部に、重い痛手を与えることになったのだった。李建彤の夫である劉景範も、高饒反党事件には直接に関わったわけではなかったが、巻き添えを食う形で、1954-1955年に政務院人民監察委員会第一副主任から地質部副部長への実質的な降格処分を受けていた<sup>(9)</sup>。

こうした時期に劉志丹の伝記を執筆することは、その内容が必然的に若き日の高岡にも及ぶため、李建彤はそれがさらなる不測の禍を呼ぶことを懸念したのである。劉志丹の伝を書くことの可否について、李の相談を受けた夫の劉景範も、また同じく陝北出身で劉とも親しかった習仲勳（1913-2002、当時国務院副総理）もそれに強く反対した。かれらもまた、高饒事件の余塵なお冷めやらぬ中、あえて劉志丹を顕彰することが政治的な波瀾を呼ぶことを慮ったのであった（その懸念は、後年はたして現実のものとなる）。

このように、李建彤は当初こそ執筆に二の足を踏んでいたが、その後工人出版社側の度重なる要請や励ましもあって<sup>(10)</sup>、次第に前向きな態度に転じ、夫や習仲勳の反対を半ば押し切る形で、執筆の準備を開始した。そして、足かけ二年の資料収集、現地取材ののち、1958年に執筆を開始して、同年冬には初稿を、そして翌年春には第二稿を書き上げたのだった。李の語るところによれば、第二稿までは登場人物がすべて実名の伝記スタイルであったが、人物があまりにも多く、かつ人間関係が錯綜し、読み物としては良い出来ではなかったため、編集者の助言を容れて、第三稿は小説体書き直したという。架空の人物が入り交じる小説体の第三稿、すなわち小説「劉志丹」は、さらにかつての劉志丹の同志たち関係者の意見を反映して書き直した第四稿（1961年春脱稿）、それをさらに手直しした第五稿（1962年春）に至ってほぼ完成した。

この間、習仲勳は第三、四稿の審閲を依頼されてそれに修正意見（高岡を描いてはならないなど）をつける一方、出版にはなお反対していた。だが、中央宣伝部副部長の周揚<sup>(11)</sup>がこの小説を高く評価していると聞かされ、さらに劉景範（当初は執筆に反対していたが、李の情熱を目の当たりにして、出版賛成に転じた）から「陝北の幹部は死んだものは死んだし、悪いやつは悪い。『劉志丹』という本を君が応援しなくて、いったい誰が応援するんだ」と説得され、最終的には「君らが絶対に出版するというのなら、それも仕方ない」と述べて、出版を黙認したのだった<sup>(12)</sup>。

こうして、小説の最終稿にあたる第六稿の出版が本決まりになると同時に、1962年7月末から『工人日報』『光明日報』『中国青年』などの報刊に、出版予定の『劉志丹』の一部章節が先行発表された<sup>(13)</sup>。

## 2 事件の政治的背景

小説『劉志丹』を反党の陰謀活動と決めつける決定は、1962年9月に開催された中共8期10中全会でなされたものだが、実はその呼び水となる水面下の動きは、『工人日報』などが先行部分掲載を始めた同年7月下旬にすでに始まっていた。最初にこの小説に問題ありと声を上げたのは、当時中共雲南省委第一書記の閻紅彦であった。

閻紅彦（1909-1967）は、劉志丹と同じく陝北出身の中共幹部であり、劉や高崗らと革命活動を共にした経歴を持っていたが、陝北での活動において劉、高らと対立を繰り返した謝子長らのグループに属し、それゆえに劉志丹死後にその跡目を継ぐ形で台頭した高崗とは反目し、高崗ありし日には、陰に陽にその抑圧を受けてきた人物だった（詳しい経緯については第Ⅱ、Ⅲ章で述べる）。李建彤は小説執筆の過程で、閻にも聞き取り取材を行ったり、原稿の閲覧を請うたりしていたが、高崗や劉志丹に反発をおぼえてきたかれは、劉志丹を顕彰することに暗に不同意を示していた。1962年7月下旬到北京を訪れたさい、閻は李建彤から間もなく出版される『劉志丹』の原稿を渡されると、早速翌日（7月23日）に李にたいして、「あなたの書いた小説について、わたしは出版に不同意です。あの時期の歴史については、〔党〕中央は結論を下していません。作者個人で責任を負えるものではないのです」という内容の書簡を送ると同時に、習仲勳に対しても李に出版をやめさせるよう求めたのだった<sup>(14)</sup>。

かねてより閻の態度や回想録<sup>(15)</sup>に不満を持っていた李建彤は、この横やりにかまわず、前述のように、7月28日より新聞での連載が開始された。当時、中共中央の会議のために北戴河にいた閻紅彦は、自分の警告が無視される形で連載が始まったことを知ると大いに怒り、これを政治問題化させる拳に出た。すなわち、8月3日に『工人日報』などの報刊の主管単位である全国总工会、共産主義青年団中央の責任者に連載中断を申し入れると共に、この問題を康生（中共中央政治局候補委員、中共中央文教小組副組長）に、その後さらに楊尚昆（中共中央辦公庁主任）に訴え出たのである<sup>(16)</sup>。この結果、『工人日報』は何の説明もせぬまま、8月4日で連載を打ち切り、他方で掲載を予定していた『人民文学』『人民日報』も、相次いで掲載を見送る措置をとった<sup>(17)</sup>。

閻紅彦は8月17日に楊尚昆に送った書簡で、小説にたいする見解を示すと同時に、必要によってはその書簡を中共中央書記處のメンバーに回覧してもらいたいと述べ、さらに9月3日には再度楊尚昆にたいして、『劉志丹』が歴史の改竄によって高崗の名誉回復を図るものだと指摘し、小説を関係者に回覧して検討の会を開くよう要請した。閻は二通の書簡の中で、小説に登場する仮名の人物を比定する対照表を作成し、高崗や習仲勳を仮託した登場人物が美化して描かれていると具体的に指摘していた。他方で、閻紅彦の訴えを受

けた康生も、8月24日に楊尚昆にたいして、書記處が「政治的傾向性を帯びている」この小説の問題の処理に乗り出すよう求める書簡を發出していた<sup>(18)</sup>。かくて、8月26日から開催されることになっていた中共8期10中全会の予備會議に、小説の第三稿、第五稿が提出され、その審査が行われるという展開になったのだった。

事態の処理が一小説にとっては異例ともいべきレベルに引き上げられたのには、閻紅彦や康生の強い働きかけがあっただけでなく、そうしたエスカレートを容易に生じさせる伏線ともいべき政治的雰囲気があった。話は三年前（1959年）のいわゆる廬山會議にさかのぼる。

中共の廬山會議は、大躍進政策による混乱が広がる中、それをもたらした「左」の是正を基調とするはずが、大躍進の問題点を指摘する彭德懷の毛沢東あて書簡が毛の逆鱗に触れ、一転して彭德懷、張聞天、黄克誠らが「右傾日和見主義反党集団」と断罪されて、政治的に葬り去られた會議として知られる。これ以降、党首脳であっても、毛沢東に意見するような挙動はみじんも許されない雰囲気が強まったと言われている會議であるが、実はその廬山會議において、毛沢東は怒りにまかせて、彭德懷ら右傾反党集団の「主要な部分は、もともとは高崗陰謀反党集団の重要メンバーであり」「網を逃れた高崗集団の残党どもが、今また風波を引き起こさんと、矢も盾もたまらず、やみくもに攻撃をしてきたのだ」<sup>(19)</sup>と指弾する文書を参会者に配布していた。すなわち、先に処分を免れた高崗の一味が彭德懷らを通じて党に叛旗を翻したのだと宣布したのである。これにより、名指しこそされなかったものの、習仲勳、劉景範らかつての高崗の人脈に連なる西北出身の党幹部は、その些細な言動までが疑惑を呼びかねない状況に置かれていたのだった。

その後、大躍進による厄災があらわとなった後、それを是正する措置がいわゆる「七千人大会」（拡大中央工作會議、1962年1-2月）でとられ、毛沢東が自己批判するとともに、この間あやまって批判された人々の名誉回復が図られた<sup>(20)</sup>。こうした風向きの変化に呼応する形で出てきたのが、名誉回復を求めて6月に党中央、および毛沢東あてに提出された彭德懷の弁明書（8万字におよぶ長大な書簡ゆえ、「八万言書」とも呼ばれる）である。「七千人大会」において、他の同志はともかく、彭德懷だけは「高饒反党集団」の一員であり、「國際的背景のもと」「党篡奪」を目論んだ人物ゆえに、名誉回復を許さないとする決定がなされたため、彭はあえて弁明書を執筆するという手段に訴えたのだった<sup>(21)</sup>。

だが、彭德懷のこの挙は、毛沢東のさらなる怒りを招いただけでなく、いったん自己批判を迫られた毛が反撃に転じる口実となってしまった。すなわち、本来は大躍進路線からの脱却、生産回復への政策調整が主題とならずだった北戴河會議（中共中央政治局工作會議、1962年8月6日～8月下旬）において、毛は開會冒頭に社会主義体制における階級

矛盾という新たな議題を提起し、国内情勢における右傾の問題やその反映である「翻案風」を重大視する態度に出たのである。「翻案風」とは、かつて事件や人物にたいしてなされた決定にたいする異議申し立て、見直しを求める動き・風潮を指すものであるが、1962年におけるそれが、彭徳懐にたいする名誉回復、ひいては旧高崗グループにたいする潜在的な名誉回復の動きと目されたものであったことは、政治の空気に敏なる者なら誰しもが感じていたことであった<sup>(22)</sup>。

小説『劉志丹』の新聞への連載が始まったのは、まさにこうした政治的雰囲気のための中のことだった。そして、閻紅彦はほかでもなく、この北戴河会議に参加するために同地に滞在していた時に、小説の連載開始を知ったのである。かくて、小さくはかつてその身を捧げた革命闘争について、自己の認識と異なる小説が世に問われようとしていることへの個人的不満ゆえに、そして大きくは右傾の「翻案風」に対して断固反撃せよと呼びかける毛沢東ら党中央の方針に積極的に呼応するために、閻紅彦は『劉志丹』を告発して政治問題化させたのだった。前述した閻紅彦や康生の中共中央への告発活動が、すべて北戴河会議の期間中であるのは、半ばは毛沢東の「翻案風」と戦えという号令があったからなのである。

### 3 事件の発生

『劉志丹』を標的とする反「翻案風」闘争は、北戴河会議に引き続いて開催された中共8期10中全会（予備会議は8月26日-9月23日、本会議は9月24-27日に北京で開催）で本格的に幕を上げた。闘争の先頭を切ったのは、言うまでもなく閻紅彦である。

10中全会の予備会議では、早くも9月6-7日から分組会議（西南局など各地方局ごとの討議）において、彭徳懐らにかんする「翻案風」批判の議論が相次いで開始されていたが、9月8日の西南組会議で、閻紅彦は「翻案風」と『劉志丹』を結びつけ、「現下の国内外の〔政治的〕気候の下、様々な人がこの機に乗ぜんとばかりに“翻案”騒ぎを起こしている。小説『劉志丹』は、習仲勳同志が執筆を取り仕切ったもので、劉志丹の宣揚にこと寄せて高崗を宣揚したものである」と発言したのだった。さらに閻の発言に加勢する形で康生が、「現在の中心的問題は、一体なぜこのような時期に高崗を宣揚しようとするのか、である」と述べ、かれらの発言が会議簡報に掲載されるや、それは巨大な衝撃となってたちまち会議の中心議題となった<sup>(23)</sup>。かくて、小説『劉志丹』の問題は、その執筆の黒幕とされた習仲勳、賈拓夫、劉景範ら「反党集団」の問題に転じ、さらに彭徳懐の問題ともリンクさせる「彭〔徳懐〕、高〔崗〕、習〔仲勳〕反党集団」の摘発へと広がっていったのであった。小説『劉志丹』は、一味の「反党綱領」だと指弾された。



予備会議で形成された『劉志丹』批判の基調は、そのまま10中全会本会議の決定となった。先に引いた9月24日の本会議での毛沢東の講話（「小説を利用して反党活動をおこなうというのは、一大発明である。……」）は、こうした『劉志丹』批判の流れの中でなされたものに他ならない。かくて、習仲勲らを取り調べる専門審査委員会の設置が決定され、以後文革にまで及ぶ長き迫害の扉が開いたのであった。

今日、小説『劉志丹』事件に言及する文章の多くは、事件を政治問題にエスカレートさせた責任を、「同志への迫害を事とする陰険な人物」康生一人にかぶせる傾向がある。「党内で闘争対象を探すことに慣れてきた」康生は、閻の告発を知るや「珍宝を手に入れたかのように喜び、ただちに……」というお定まりの記述である<sup>(24)</sup>。また、先の毛沢東の講話内容についても、「小説を利用して……」という言葉は、会の席上（あるいは会に先立って）、康生が毛沢東に手渡したメモの文句であって、毛はそれを読み上げたに過ぎない（毛は後に「小説を利用して反党を行うというのは、康生の発見である」と述べた）という見解がある<sup>(25)</sup>。だが、それらはいずれも元をたどれば薄一波の回想<sup>(26)</sup>のみに行き着くのであって、かりにそうだとすると、毛自身が講話でそう断言したという事実は動かない。さらに、康生が述べるところによれば、小説・文芸と「翻案風」、反党活動を結びつけることは、講話以前に毛が康生を呼んで意を含めていたことであつたという<sup>(27)</sup>。

また、習仲勲らを反党集団と認定することは、毛がこの講話をする二日前にすでになされていたことであつた。すなわち、10中全会本会議開幕に先立つ9月22日には、予備会議の討議を受け、20人からなる「習仲勲ら同志の反党活動を精査するための專案審査委員会」（主任：康生）が中共中央によって組織されており<sup>(28)</sup>、習仲勲、彭德懷、張聞天、黄克誠、賈拓夫の5人は、10中全会など党の重要会議に出席する資格、および天安門に上る資格を剥奪されていたのである<sup>(29)</sup>。確かに閻紅彦の誣告とそれを受けてなされた康生の策謀<sup>(30)</sup>が、小説『劉志丹』を政治問題化させる上で、大きなきっかけとなったことは間違いないものの、それが国務院副総理の習仲勲にたいする反党行為認定にまで行き着いたことに、毛沢東の意向が大きくあづかっていたことは、ほぼ疑いない。

10中全会予備会議における閻紅彦の誣告をうけ、同会議では直ちに小説『劉志丹』の原稿審査が行われたが、審査の実務（小説に登場する仮名の人物の比定作業）を命じられた林牧（当時、陝西省委第一書記・張徳生の秘書）によれば、込み入った人間関係を背景とした『劉志丹』を読み解ける者は、閻紅彦以外にはほとんどいなかった。だが、それにも関わらず、閻、康の激しい指弾を聞き、その背景にある毛沢東の意向を忖度した中共幹部、とりわけ薄一波、劉瀾濤らは進んで習仲勲ら西北出身の関係者を告発し、その状況はあたかも集団的ヒステリーの様相を呈したという<sup>(31)</sup>。いわば、1959年の廬山会議以来定

着した中共幹部による「党性」の貫徹、毛沢東への忠誠に名を借りた保身の行動パターン（批判の刃やその火の粉がおのれに及んでくるのを極端に忌避するがゆえに、不幸にもスケープ・ゴートにされてしまった同志を進んで鞭打つ行動様式）が、ここでも繰り返されたのであった。

実は、この1962年の前半においては、かつての反右派闘争で「右派」のレッテルを貼られた知識人たちへの処分撤回、名誉回復が実施されつつあったが、そうした一種の雪解けは、「翻案風」との闘争を強調したこの10中全会を境に急速に弱まってしまうのである。その意味では、「絶対に階級闘争を忘れてはならない」（毛沢東）ことを確認した8期10中全会は、中国政治史においても大きな転換点となるものであった。

さて、8期10中全会の予備会議で『劉志丹』の審査が行われるということを知られた李建彤は、それが閻紅彦の差し金であることを察知し、「そちちが康生に言うのなら、こちらは中央宣伝部に言ってやる」とばかりに、中央宣伝部（周揚）に対して二通の書簡を送った。一通は、李が小説取材の過程でつかんだ閻紅彦の経歴に関する汚点を告発するもの、もう一通は、閻が1962年に発表した回想録に見える史実への歪曲を徹底的に論駁するものだった<sup>(32)</sup>。だが、史実に基づく論争なら絶対に負けはしないとするこの大胆な行動は、事態が史実の是非をこえる政治闘争になってしまった時点では、無意味どころか逆に「反党行為」を裏付けるさらなる罪証にされるだけであった。8期10中全会閉幕後、前述の專案審査委員会は直ちに李建彤、工人出版社から小説執筆に関連したあらゆる資料を押収すると同時に、「『劉志丹』稿件審査小組」を立ち上げ、10月2日の康生の審査方針に基づいて、小説執筆の全過程を洗い出す作業を開始した。

「審査小組」は、小説に登場する人物の比定に全力をあげると共に、小説の取材、執筆、編集に直接間接に関わった人々、果ては李の知人で偶然に『劉志丹』の原稿を目にした人にまで取り調べを行い、その結果を1963年5月に、「『劉志丹』に対する審査報告（草稿）」という形でとりまとめた。果たしてこの小説は、劉志丹の活躍した西北根拠地の地位と役割を「誇大に歪曲し」、「毛沢東思想を劉志丹思想に改変」と共に、「高崗の名誉回復を行い」「習仲勳を称揚」したものであり、それゆえに「西北党史の偽造書」であって「習仲勳反党集団の綱領である」と断定された。また、この報告を受けて作成された「習〔仲勳〕、賈〔拓夫〕、劉〔景範〕專案審査小組」の報告（1966年5月）も、同様の認定の上に立って、「『劉志丹』の執筆は、習仲勳反党秘密集団が長期にわたって企みを進めたものであり、『劉志丹』の第一作者は習仲勳、第二作者は劉景範、そして執筆者が李建彤なのである」と結論づけていた<sup>(33)</sup>。

審査の中で列挙された『劉志丹』の罪状や非難のロジックを、今日の我々が理解するこ

とはたやすくはないが、李建彤が語るところの五つの「罪状」<sup>(34)</sup> について、若干の解説をすれば、次のようになるであろう。① 小説に登場する「羅炎」は高崗を描いたものである（高崗は反党陰謀家なのであって、かりに仮名であっても革命運動に加わったことを描くのは、それ自体が高崗の名誉回復を目論む反党行為なのである）。② 毛沢東思想を剽窃して劉志丹思想に改変している（武装闘争や農民運動について、あたかも毛沢東以前に劉志丹が革命論を持っていたかのように描くのは、毛沢東を誹謗する反党行為なのである。同様のケースは、広東農民運動の先駆者彭湃の事跡が文革中に抹殺され、はては彭が反革命家とされたことにも見られる）。③ 小説は中央ソヴィエト区を貶め、陝甘ソ区を持ち上げていく（地方の革命根拠地が、あたかも毛の率いる中央根拠地から自立して活動していたごとくに描くことは、党中央に対する挑戦行為であり、不当なのである）。④ 小説は習仲勳が党や国家を篡奪するための政治資本を作り出している（小説に有能な人物として習仲勳〔小説では許鍾〕が登場することは、かれが毛沢東をしのぐ革命家の資質を備えていることを暗示するがゆえに、反党行為なのである）。⑤ 小説は党内の路線闘争を描いている（党の暗部を描くことは、それ自体禁忌であり、党の権威への挑戦と見なされるのである）。

こうした「罪状」は、今日から見れば荒唐無稽というほかないものではあるが、この進展と事実とは当然に別物である。李建彤をはじめとする関係者は、長期にわたって隔離審査を受けるだけでなく、1966年に文化大革命が勃発すると、激しい迫害にさらされることになった。監禁状態に置かれた李建彤は、文革で『劉志丹』事件の関係者として各地で摘発された大小の中共幹部の「罪証」を確認しようとする文革造反派の査問に絶え間なくさらされ、夫の劉景範も激しい「批闘」ののち、1968年5月に「現行反革命」の罪名で逮捕され、北京の秦城監獄につながってしまった。李建彤自身は、投獄こそ免れたものの、1970年に党籍を剥奪された上で、江西省の五七幹部学校へ送られた<sup>(35)</sup>。彼女が投獄を免れたのは、各地の様々な造反派が『劉志丹』事件に関わる地方幹部を打倒する上で、李から関連する供述を引き出すため、随時彼女を尋問できるようにしておいた方がよいという「配慮」があったと見られる。李建彤が病氣治療を理由に北京にもどれた（監視はなお続いた）のは、1972年のことだった。一方、夫の劉景範が釈放されたのは、毛沢東自身の指示<sup>(36)</sup>を受けた1974年暮れのことであった。これは、李の働きかけで劉志丹夫人の同桂榮が義弟・劉景範の釈放を懇願する書簡を毛沢東に送ったのにたいして、毛が応えたものである。釈放された時、劉は幻覚、幻聴に悩まされ、すでに廃人の一步手前の状態だったという<sup>(37)</sup>。

一方、『劉志丹』事件の発端を作った閻紅彦も、文革の混乱の中で、命を落としていた。もともと、閻の場合は『劉志丹』事件への連座ではなく、中共雲南省委第一書記のかれが

雲南の造反派の標的となり、大衆集会での吊し上げが避けられなくなったことによる自殺であった（1967年1月死去）。その意味では、かれもまた文革の被害者だったわけである。閻が小説『劉志丹』を告発したことの背景には、旧敵の高崗が権勢を誇った時期にかぶせられた不評が高崗の失脚によってくつがえされ、毛沢東がそれまでの閻の不遇に謝罪したことがあったと見られる。すなわち、高饒事件後の1958年3月に開催された中共中央政治局拡大会議（成都会議）の席上、毛沢東は閻を呼び、「閻紅彦同志よ、十数年にわたって君に不当な扱いをしてしまって、すまなかった」と述べたのであった<sup>(38)</sup>。恐らくは、閻はこの毛の発言に意を強くし、以後陝北革命運動の歴史について積極的に発言をするようになったのであろう。『劉志丹』の告発も同様に、陝北の革命運動は劉志丹や高崗ではなく、謝子長やおのれを中心に描くべきだという持論から導き出されたものだったはずである。だが、そうした立場から毛の反「翻案風」に棹さしたかれも、文革においては毛の庇護を受けることはできなかったのである。

毛の死去により文革が終わったあと、一連の冤罪再審査、名誉回復の中で、小説『劉志丹』事件に連座した人々の名誉も回復されることになった。まず、李建彤自身の直訴を経て、1979年8月に小説『劉志丹』の名誉回復がなされ、同書が反党小説ではなく、「老世代のプロレタリア革命家を称え、革命闘争の歴史を描いたかなり優れた小説である」と認定された<sup>(39)</sup>。次いで翌年初めには、『劉志丹』事件のさいに持ち出された「彭、高、習反党集団」「習仲勳反党集団」が冤罪であることが認められ<sup>(40)</sup>、習仲勳、劉景範をはじめとして、『劉志丹』事件に連座した数多の関係者の名誉が回復されたのだった。これら名誉回復にかんする公文書は、いずれもそうした冤罪が、康生、林彪、四人組の悪辣な企みによって引き起こされたものであると宣告していた。

ちなみに、文革の迫害の中で命を落とした閻紅彦についても、1977年に名誉回復がなされ、翌年1月に改めて追悼会と遺灰の八宝山革命公墓への安置式が執り行われている<sup>(41)</sup>。

## II 史実の世界

---

小説『劉志丹』が大きな政治事件に発展し、多くの冤罪被害者を生んだのみならず、当時の文学・文芸にとっても、まさに「鶏を絞め殺して猿に見せる」ごとき威圧となったことは、中国当代文学を論ずる人々の衆目一致するところである。そして、その「鶏」として小説『劉志丹』が選ばれたことに、多分に偶然の要素——つまり反「翻案風」闘争がまさに巻き起こらんとしていた時期に同小説がたまたま発表されたこと——が作用しているのも、また事実であろう。

だが、この小説およびこの小説に描かれた陝北の革命運動の歴史について、閻紅彦が異常とも言えるほどの執着を持ち続けたことが、この小説を事件に仕立てる重要な背景になっている以上、この小説のいったい何が問題だったのかを探るためにも、小説ではなく、歴史人物劉志丹とその陝北での革命運動の実際について、つまりは「史実の世界」をまず整理し、そして劉志丹らの革命運動についての中共の事後評価や裁定がどのように推移したのか、つまりは「歴史認識の世界」を今いちど精査する必要があるだろう。何となれば、この小説が完成を見る以前から、作者李建彤の理解者であった習仲勳も、その反対者であった閻紅彦も、同小説が文学の範疇を越える政治の問題になりかねないことを感じていたからである。習仲勳は、「劉志丹を描けば必然的にかれが党内で受けた迫害について触れることになり、かれを迫害した連中が間違いなく報復してくるだろう。連中は解放後も権勢も維持しており、報復されればただでは済まない」と感じていたし、他方でその「連中」に含まれる閻紅彦は李建彤にたいし、劉志丹の革命活動の歴史について「〔党〕中央は結論を下していない。作者個人で責任を負えるものではない」というアドバイスとも恫喝ともつかない警告をしていたのであった<sup>(42)</sup>。

では、小説『劉志丹』の舞台となった1930年代初めの陝西北部に話を移そう。

## 1 劉志丹とその同志たち

劉志丹が活躍した陝北・陝甘辺（陝西・甘肅省境地帯）の革命運動は、1927年の国共分裂後に発動された武装蜂起を機に、辺鄙な農村部・山岳地帯での遊撃戦、「打富濟貧」（富める者から奪い、貧しい者に施す）を掲げる反乱として展開した<sup>(43)</sup>。かつて広東の黄埔軍官学校（第4期生）でも学んだことのある劉志丹（1925年に中共入党）は、陝西省委の指導を受けつつも、郷里陝北において、いわゆる「土匪」「刀客」「哥老会」から大小の地方軍閥にまで及ぶ広い人脈を生かしながら、「官」とも「匪」とも不即不離の關係を保つ特色ある革命活動を行っていた<sup>(44)</sup>。それは、「官」と「匪」とが往々にして入れ替わるような、複雑に錯綜する陝西地方社会の実情を巧みに利用した貧民救済闘争の積み重ねであったということも可能である。

劉志丹の革命運動は苦難の連続ではあったが、「老劉」と慕われるかれの人格や巧みな農村・山村遊撃戦術によって、次第に民衆の支持を集め、1930年代初めには無視できない勢力と名望を陝北、陝甘辺一帯に確立するに至った。ただし、当時陝西北部で活動をしていた共産主義者（あるいは反乱集団）は、かれのグループばかりではなかった。地縁を異にするもう一つのグループも、劉志丹集団と接触をくり返しながら、近接地で革命活動をしていたのである。それが、安定県（劉志丹の郷里である保安県の東北約80キロ、現

名は子長県)出身の中共黨員・謝子長(1897-1935)の率いるグループであった。謝子長は劉志丹よりも6歳年上だが、学歴(榆林中学)も入党時期も没年も、劉とほぼ同じく、似たようなバックグラウンドを持つ人物だと言ってよい。劉志丹が「老劉」と呼ばれたように、かれも「謝青天」という愛称で地元民に慕われていたと言われている<sup>(45)</sup>。「青天」とは悪を懲らしめる清廉な官吏にたいする呼称であり、かれもまた劉志丹同様に、「官」と「匪」の間を渡り歩いて貧しい民衆を救うという運動スタイルをとっていたのであった。かれの出身地が死後にその名にちなんで改称されていることも、劉志丹と同じである。

このように、劉と謝はよく似た革命家であったが、その率いる集団の規模という点から見ると、いくさ上手でより土着性の強い(それゆえ雑多な人脈も多い)劉志丹派の勢力の方が、謝子長派よりも若干大きかったようである。そして、両者が似たような指導者に率いられ、近接する地域で活動していたがために、主義を同じくするはずの両者の間には、主導権をめぐる相互不信と軋轢とが、抜きがたく存在していた。

今日、陝西(西北)の中共党史にかんする著作は、どれも判で押したようにこの二人の事績を顕彰し、両者が緊密な協力・連携のもとで陝北の革命根拠地を發展させたと述べている<sup>(46)</sup>が、これは烈士の名誉と党内の融和を守るための美辞であって、事実はこれと大いに異なる。それどころか、事実はこれと異なるがゆえに、小説『劉志丹』をとりまく大問題が発生したのであって、劉・謝の両者とかれらに連なる同志たちの不和の実情を知ることなくして、『劉志丹』の問題の根深さを理解することはできない。

先に30年代初めの時点では、劉志丹らのグループが謝子長グループよりもやや大きかったと述べたが、現実には両者ともに、数百人の規模に過ぎなかった。両者の相互不信があらわとなった最初の事件は、1932年2月に、謝子長の率いるグループが、劉志丹の部隊を「成分不純」を口実に、半ばだまし討ちの形で武装解除し、一部首領を殺害した内ゲバ(事件発生の地名から「三甲塬事件」と呼ばれる)であった<sup>(47)</sup>。事件は、折から山西省より黄河を渡って陝北に入った閻紅彦、楊重遠らの部隊を謝子長が抱き込み、劉志丹部隊と会合して「抗日反帝同盟軍」なる部隊に改編(1931年12月)した後に起こった。閻紅彦は謝子長と同じく陝西安定県の出身で、謝と共に起こした暴動(清澗起義、1927年10月)が失敗に終わって後、いったん謝と別れて山西で活動、1931年秋に晋西遊撃隊なる部隊30人ほどと共に陝北に入り、劉志丹部隊に合流、そこで折から陝西省委の指示を持ってやってきた謝子長と再会したのだった。

謝子長は、かねてより劉志丹部隊に不純分子(すなわちアウトローたち)の混在、土匪まがいの作風といった規律面の問題があること、共産党の旗印(紅旗)を掲げることに消極的なことに不満を持っていた。劉が紅旗を掲げることに慎重だったのは、旗幟を鮮明に

することが地方社会の無用の反発を招くことを懸念したかららしい——それゆえに1931年暮れに組織されたのは「抗日反帝同盟軍」という名の部隊だった——のだが、それは共産党主体の遊撃隊を組織せよと命じられた謝子長には我慢できなかったのであった<sup>(48)</sup>。かくて1932年2月、事前に示し合わせた謝子長と閻紅彦らは、兵士大会の場で突如劉志丹部隊の武装解除を宣告、それを合図に閻紅彦らは劉志丹部隊の一部首領（趙連璧など）を射殺したのであった。その場に居合わせた劉志丹も監禁され、劉部隊の400人余りに対しては、部隊の解散と即時帰郷が命じられた。これが「三甲塬事件」と呼ばれるものである。劉志丹の実弟・劉景範もこの時に部隊を追放された。劉志丹の仲間の多くも散り散りにさせられ、ある者はもとの土匪にもどり、またある者は地方軍閥に降順した。

一方、この「肅軍」によって権力を握った謝子長は、事件の後、陝西省委に対して、劉志丹の部隊は「全くの土匪の烏合であり……漸次改造するというやり方は全くの幻想にすぎなかった」がゆえに「土匪流氓分子を断固肅清して部隊を刷新するよりほかなく」、結果としてそれを実行し、「陝甘遊撃隊」を組織することに成功したと報告した。事件の後、陝西省委はこの「肅軍」のやり方を批判して劉志丹の釈放を命じ、また謝の指揮下の「陝甘遊撃隊」もその後の作戦行動において大敗北を喫したため、劉志丹は第一線の指揮に復帰し、他方で謝子長、閻紅彦は32年末に更迭され、上海に召喚されて批判を受ける（受訓）こととなった。劉志丹の復帰後、陝北での闘争は表面的には比較的順調に進展したものの、「三甲塬事件」は陝北の革命組織内部に深い傷跡を残したのであった。

## 2 右傾批判の風波

1933年以降、劉志丹の遊撃戦闘争は前年12月に成立した紅26軍を通じて展開された。26軍（および党組織系統としての陝甘辺特委）には、劉志丹のほか、劉の忠実な部下である高崗や習仲勳、部隊に復帰した劉景範らがかかわっていた。紅軍の正規部隊ではあったが、紅26軍はなお多くのアウトローたち、土匪出身者たちを抱え、上級組織である陝西省委の命令をそのまま実行しないこともたびたびであったらしい。むろん、上級組織の命令といっても、それは往々にして紅軍部隊の実勢や農村社会の実情を無視したいわゆる「左傾」路線のそれであったから、体よくそれをサボタージュしたり、根拠地の維持・拡大を図るために山村部での活動に重点を置いたり、あるいは土匪集団などの雑多な地方勢力と共闘したりすることは、陝北の実情に即した革命闘争のあり方であったとも言えるだろう。

ともあれ、劉の率いる紅26軍と陝甘辺特委は、紆余曲折に満ちた転戦の末、1934年半ばまでに、陝西地方軍閥による围剿作戦を撃退して二十あまりの県に勢力を伸ばし、11月には陝西・甘粛省境地帯の南梁（現在の甘粛省華池県）に陝甘辺ソヴィエト政府を樹立

するまでになった。政府主席には習仲勳が、軍事委員会主席には劉志丹が就任、そして基幹軍にあたる26軍（42師）の政治委員は高崗であった。だが、まさにこの時期、陝北にもどってきた謝子長らと劉志丹らとの因縁の第二幕が上がることになるのである。

この間、謝子長は1933年夏に上海での「受訓」を終えると、いったん中共北方局（天津）のもとで活動し、その年の暮れに西北軍事特派員の肩書きで陝北にもどった。中共の陝北特委を再建し、陝北遊撃隊の苦境を打開するのが、北方局がかれに課した使命であった。陝北特委、陝北遊撃隊については、若干の説明が要るであろう<sup>(49)</sup>。まず確認しておかねばならないのは、陝北特委と劉志丹らの陝甘辺特委とは、名称が似ており、活動地域も隣接しているが、別系統の組織であるということである。系統で言えば、陝北特委が中共の北方局の指導を受けるのに対して、陝甘辺特委の方は陝西省委（省委がしばしば検挙されたため、連絡が十分にとれる状態ではなかったが）の下部組織であった。一方、陝北遊撃隊（馬明方、崔田夫らが首領）も、時に劉志丹の紅26軍の支援を受け、協調作戦をとることもあったが、おおむね独自にゲリラ戦を展開することが多く、謝子長が陝北にもどった1933年12月の時点では、武装闘争の失敗が重なり、解体目前の危機に直面していた。

謝子長は陝北にもどると、同じく北方局からやや遅れて派遣されてきた郭洪濤と共に、陝北党組織、遊撃隊の立て直しにあたった。郭洪濤（1909-2004）は謝と同じく陝北出身の中共黨員であり、謝が陝北に派遣されるさいに、閻紅彦に代わる片腕として抜擢されたのだった<sup>(50)</sup>。以後、郭は西北の革命運動（およびそれに伴う党内闘争）に大きく関わる人物となる。陝甘辺側に劉志丹—高崗の強い絆と継承関係があるとすれば、同様の関係は陝北側においては謝子長—郭洪濤の間に見られると言える、わかりやすいであろう。

謝子長、郭洪濤は1934年1月以降、中共北方局（責任者は孔原）の指示に基づいて陝北特委、陝北遊撃隊を刷新し、次いで約600人の遊撃隊を率いて7月に南梁の劉志丹部隊と会同した。陝北革命の両雄、謝子長と劉志丹はここに1932年以来の再会を果たしたのである。

この時、謝子長、郭洪濤は北方局が紅26軍、および陝甘辺特委に宛てた指示書簡2通を携えていた<sup>(51)</sup>。北方局は陝甘辺特委を直接指導する立場にはなかったが、様々なルートからの情報（謝子長らからの情報を含む）を通じて、劉志丹らの活動には「右傾日和見主義」の嫌いがあると認識し、また陝西省委が機能不全に陥っていることもあり、謝子長らを通じて陝甘辺特委の誤りを糾す措置に出たのである。7月25日に南梁で開催された陝甘辺特委と陝北特委の連席会議（閻家窪子会議と呼ばれる）の席上、謝子長は陝甘辺特委（26軍）の「右傾日和見主義」を強く批判する書簡を伝達し、書簡の内容に沿って劉志丹らの誤りを激しく指弾した。いわゆる「右傾日和見主義」は、劉志丹がそれ以前にも幾度とな



く聞かされた批判のレットテルであったが、果たして今回もその批判は、党組織や軍の「濃厚な土匪的色彩」、「山岳主義（原文梢山主義——山村での散発的闘争ばかりをすること）」、「逃亡主義（原文逃跑主義——敵と正面から戦おうとしないこと）」に向けられたものだった。だが、この批判のレットテルが他ならぬ謝子長の口から出たことに、陝甘辺特委の関係者は一様に強いショックを受けたという<sup>(52)</sup>。

さらに連席会議では、高崗を26軍42師の政治委員から解任した上で、審査のために上海の臨時中央のもとに召喚すること、政治委員の職は謝子長が引き継ぐことが決定された。高崗の政治規律、人格に問題が多すぎる<sup>(53)</sup> というのがその理由だったが、この人事決定は謝子長らの陝北特委が、北方局の権威を借りて劉志丹ら陝甘辺特委の片腕をもぎ、事実上陝甘辺特委と26軍に対して、政治的に優位に立つことを意味した。寝耳に水の批判を浴びた陝甘辺特委の側のメンバーは、それを誣告と受け取り、当然に不満の声を上げた<sup>(54)</sup> が、北方局の指示を錦旗とする謝子長、郭洪濤は頑として受け付けなかった<sup>(55)</sup>。結局、高崗の処分は政治委員からの解任だけで、上海召喚こそ免れたものの、劉志丹らのグループにしてみれば、閻家奎子会議は形を変えた「三甲塬事件」の再演に他ならなかったのである。

謝子長、郭洪濤ら陝北派による劉志丹ら陝甘辺派への批判は、それに止まらなかった。謝は閻家奎子会議後の9月5日に、中共北方局に会議の様態を報告した書簡の中で、「〔26軍〕42師に一貫しているのは、軍事的には秩序なき逃亡であり、困難な民衆工作において西北ソヴィエト区の任務を達成することはできない。……中央が42師を指導する軍・政の同志を派遣し、かねてよりの右傾同志を別の活動に配置転換させるよう求める」<sup>(56)</sup> と述べていた。書簡で謝がその更迭を求めた「かねてよりの右傾同志（老右傾同志）」とは、劉志丹、高崗を指すものにほかならない。また、郭洪濤も同会議の後に、劉志丹部隊の「右傾」の歩みを列挙し、それを糾弾する「紅26軍長期闘争的主要教訓」なる文章を陝北特委の機関誌『西北闘争』に発表するだけでなく、それを北方局に送り、陝甘辺特委の刷新が必要であることを訴えたのだった<sup>(57)</sup>。

一方、批判を受けた陝甘辺特委の側も黙ってはいなかった。1934年冬に陝甘辺特委は陝北特委に書簡を送り、陝北で行われている集団農場政策を李立三路線の復活だと非難、さらにその批判書簡を陝北側の了解を得ないまま、陝甘辺の機関誌『布爾什維克的生活』に掲載するにいたった<sup>(58)</sup>。年が明けて1935年2月、陝北特委と陝甘辺特委は、相互不信を抱えつつも、再度連席会議を開いて、両組織の統合組織として中共西北工作委員会と西北革命軍事委員会を成立させ、続いていわゆる「反圍剿」の統一軍事行動を起こして国民党側の侵攻を撃退することに成功した。だが、それにもかかわらず、両組織の軋轢は依然

として存在し続けた<sup>(59)</sup>。とりわけ、謝子長の死（「反匪剿」戦での重傷がもとで1935年2月21日に死去）の後、その後を引き継いだ郭洪濤と劉志丹、高崗との間の反目は際だっており、これが同年9月から11月にかけての肅清事件の下地をなしていくのである。

### 3 1935年秋の肅清運動と劉志丹の死

1935年秋に起こった劉志丹、高崗ら陝甘辺派にたいする党内肅清事件は、劉にかんする歴史評価問題において、最も錯綜し、かつ最も「敏感」な事案である<sup>(60)</sup>。この事件を理解する上で、今一度その背景を1935年初めに焦点を合わせて確認しておこう。陝西・甘肅省境（陝甘辺）、陝西省北部（陝北）一帯には、党組織としては旧陝甘辺特委と旧陝北特委が合同して成立した中共西北工作委員会が存在していた。軍組織としては、陝甘辺特委の指導下にあった紅26軍（兵力約1000）と、陝北特委の指導下にあった紅27軍（1935年1月末に、もとの陝北遊撃隊を改編して成立、兵力約1000）があった。26軍を指導したのは劉志丹、高崗、習仲勳らであり、27軍を指導したのは謝子長、郭洪濤、賀晋年らであったが、双方共に山頭主義（ファクショナリズム）の傾向が強く、互いの関係は決して良好なものではなかった。

さて、謝子長、郭洪濤らからの報告により、陝甘辺特委（26軍）の「右傾問題の深刻さ」を再確認した中共北方局は、1934年後半から翌年にかけて、断続的に指示を出し、劉志丹らの「右傾日和見主義」を厳しく叱責するだけでなく、1935年5月に、その徹底解決を図るために朱理治（1907-1978）なる青年幹部を陝北に派遣した。肩書きは、中共中央駐北方代表である。当時、いわゆる中共中央は長征の途上にあつて、とても地方党組織の指導をできる状態ではなかった。それゆえ、陝西の地方組織にとっては、天津にある北方局こそが——それが実態として如何に弱体化していようと——認識しうる最上級の組織であり、そこから派遣されてきた代表は、まさに「中央」の化身にほかならなかつた<sup>(61)</sup>。朱理治は7月初めに陝北（延川県永坪鎮）に到着するや、中共西北工作委員会に対して北方局からの指示書簡5通を伝達、その中で旧陝甘辺特委、紅26軍の「右傾解党主義」を激しく非難した。そもそも、謝子長や郭洪濤を陝北に派遣したのは北方局であり、北方局はその彼らから26軍には深刻な問題があるという報告を受けて朱理治を派遣したわけだから、朱理治は当初から、郭洪濤ら旧陝北特委（紅27軍）の認識を受け入れる形で、劉志丹、高崗ら26軍の「誤り」を是正せんと乗り込んできたと言えるであろう。

その後、朱の陝北入りを後追うように、9月初めには同じく陝北の右傾問題を処理するために上海の臨時中央局から送り込まれた聶洪鈞（1905-1966）なる人物が到着、続いて同月15日には南方から転戦してきた紅25軍（旧第4方面軍系統の軍で、26軍、27軍とは

別系統、軍長：徐海東、政治委員：程子華）が陝北の永坪鎮に到着した。劉志丹、高崗に対し、はなから「右傾主義」の先入観を持って現地入りした朱理治、聶洪鈞らは、現地幹部の郭洪濤からさらに劉、高らの右傾ぶりを吹き込まれ、26軍は単に右傾しているだけでなく、かなりの数の右派（当時のロジックで言えば、「右派」とは密かに党組織の破壊を目論むスパイとはほぼ同義である）を抱えているということを確認し、大規模な「反右派闘争」が必要だと考えるに至ったという。実はこれより先、1934年前半に謝子長や郭洪濤は陝北特委の刷新のため、陝北で大がかりな粛清工作を行っており、それによって組織の再建に大きな効果を上げたと自負していた<sup>(62)</sup>。郭洪濤らにしてみれば、朱理治らの支援を得て、同様の党内闘争を今度は陝甘辺側（26軍）にたいして行うことが必要だと考えたのであろう。

郭洪濤や朱理治、聶洪鈞が「反右派闘争」という粛清運動で頼りにしたのは、陝北にやってきたばかりの紅25軍であった。それは、ひとつには25軍が26軍に対して兵力において優位にあり、今ひとつには、25軍が鄂豫皖根拠地時期以来、いわゆる「粛清」において顕著な成果をあげており、中でもその参謀長の戴季英（1906-1997）が経験に富む粛清のスペシャリストだったからであった。

紅25、26、27の各軍が9月17日に紅15軍団に統合再編されると、中共西北代表団（朱理治、聶洪鈞からなり、後に旧25軍の政治委員だった程子華が追加された）の差配のもと、党組織、軍の要職は瞬く間に旧25軍、27軍の幹部によって占められ、同時に政治保衛局系列の組織（すなわち粛清機関）が設立され、ここに粛清の実施は避けられないものとなった。9月21日、「赤色戒厳令」がしかれ、民衆を動員する形の階級路線の実施が執行された。ついに粛清が始まったのである。9月の下旬より、何人かの「右派」幹部に対する拘束・拷問によって、劉志丹、高崗、張秀山といった旧26軍指導者が右派であるという自白が引き出されるや、戴季英の率いる西北保衛局は、朱理治、聶洪鈞、郭洪濤、程子華らの支持、黙認のもと、直ちに劉志丹、高崗、張秀山、習仲勳、張策、劉景範ら旧26軍、陝甘辺特委関係の幹部を次々と逮捕した<sup>(63)</sup>。これと並行して、根拠地各地では数多くの基層幹部が「右派」「反革命」「スパイ」の嫌疑で殺害された<sup>(64)</sup>。9月から10月にかけて吹き荒れた粛清運動は、それまで陝北の革命運動の主力をなし、民衆の支持を得ていた劉志丹麾下の幹部を根こそぎにするなど、苛烈を極めたため、紅軍部隊の間にも動揺や相互不信が広がり、はては一部の民衆は粛清を「偽紅軍」（すなわち第25軍）が旧26軍を瓦解させるために仕組んだ策謀だと見なして、共産党支配から離脱、寝返り（“反水”と呼ばれる）するに至った<sup>(65)</sup>。

1935年秋の当時、中共と紅軍にとって残された最後の根拠地が、このような粛清の嵐

によって危機を迎えていた時、救世主の如くに現れたのが、毛沢東ら中共中央の長征部隊であった。呉旗鎮を経て11月初めに陝北の甘泉県下寺湾（延安の西南約40キロ）に入った毛沢東、張聞天ら中共中央は、そこで郭洪濤、聶洪鈞らから肅清に関する報告を聴取している<sup>(66)</sup>。中国での通説によれば、毛沢東をはじめとする中共中央の指導者たちはその報告を聴取するや、事態の深刻さに驚き、その場で「逮捕・査問・処刑の停止と全面的に中央による処理を待つこと」を命じると同時に、王首道らを瓦窯堡（陝北の党組織の所在地）に急派して西北保衛局を接収管理し、事態を沈静化させたため、捕らえられた旧26軍幹部は最終的に全員釈放されたと言われている。劉志丹、高崗ら西北の革命家たちは間一髪のところまで救い出され、かくて西北の根拠地は危機を脱することができた、という説明である<sup>(67)</sup>。

しかしながら、陝北に到達した中共中央にあって、実際に陝北での肅清の停止、是正を直接に指導し、事後処理に当たったのは、毛沢東よりもむしろ張聞天であった<sup>(68)</sup>。すなわち、11月初めの時点で、中央と西北の紅軍が直面していた最も喫緊の問題は、折から行われていた国民党軍の「囲剿」を如何に撃退するかという軍事問題であり、毛沢東や張聞天らが肅清を含む陝北の現状についての報告を受けた11月3日の会議では、中央が暫時ふた手に分かれて軍事、党務を指導することを決定していたのである。つまり、毛沢東、周恩来らは軍事指揮のために前線に進発し、後方の活動（肅清の実態調査をはじめとする党務や供給体制の整備）は瓦窯堡に入る張聞天、秦邦憲（博古）、李維漢らが担当するという分担が決定されたのであった<sup>(69)</sup>。

11月10日に張聞天は中央機関を率いて瓦窯堡入りし、その日のうちに、肅清問題を調査するグループ（秦邦憲、董必武、王首道、張雲逸、李維漢、郭洪濤）を設置した。同グループによる調査の結果は直接に張聞天に報告され、かくて劉志丹、高崗、習仲勳ら監禁されていた肅清の被害者たちが、ようやく釈放される運びとなった。次いで11月26日、中共中央は「肅清工作審査の決定」を出し、陝北の肅清における「極左主義」と「狂熱病（原文瘋狂病）」の誤りを是正することを決定した。

ただし、陝北の肅清に見られた誤りに対して、張聞天らは確かにそれを是正する応急策を講じたとは言えるものの、その解決策が根本からこの肅清を見直し、批判する性質のものではなかったことは、この問題の後の紛糾を理解するためにも、特に指摘しておく必要がある。なぜなら、郭洪濤や聶洪鈞らから肅清に関する報告を受けた際、張聞天にせよ、毛沢東にせよ、党中央の指導者たちは、右派に対する肅清そのものには決して反対してはならず、「一般的に見れば、中央代表団に関しては、党の指導は正しいものだった」<sup>(70)</sup>との判断を下していたからである。また、前述の中共中央「肅清工作審査の決定」にしても、

西北の根拠地に「右傾の誤り」が確かに存在したことを認定し、肅清自体についても、「過去において、陝甘晋省委は、右傾解党主義に反対する闘争と反革命の右派を断固として肅清する闘争を指導してきたが、それらは一般的に必要なものであり、正しいものだった」<sup>(71)</sup>という具合に、それを原則的に認める立場をとっていたのであった。この決定と相前後して、肅清の過程で「摘発」された何名かの「右派」被疑者が改めて公判による有罪判決を受け、死刑を含む刑の執行が中共指導者の立ち合いのもとで行われた<sup>(72)</sup>のはそのゆえであった。つまりは、劉志丹、高崗といった西北の指導者を処刑寸前にまで追いやった肅清の誤りは、「個別」の誤りというレベルに留め置かれたわけである。

これはあきらかに、肅清の混乱を穏便におさめようという配慮から下された措置であろう。肅清当時、朱理治、郭洪濤、聶洪鈞、戴季英ら陝北の党指導者たちの肅清問題についての態度は、基本的には一致しており、旧紅25軍の指導者たちも概ね肅清を支持する立場にあった。陝北に到着したばかりの党中央にしてみれば、現地の状況を把握する上で、郭洪濤ら現地幹部の見解を尊重しないわけにはいかなかったであろうし、また旧紅25軍系の勢力も中央紅軍に匹敵するほど強大であった。かくて、張聞天の指導する中共の党務委員会は党中央の決定にもとづき、11月30日付けで「陝甘地域の肅清活動において戴季英、聶洪鈞両同志の犯した誤りに関する決議」を出し、その中で肅清の「深刻な誤り」の責任を肅清の実務に当たった戴季英と聶洪鈞の二人に負わせて処分を終えたのだった。戴と聶の二人には、それぞれ「最終警告」と「嚴重警告」の処分が下された<sup>(73)</sup>。

この肅清事件をめぐる再審査と処分の見直しは、その後いわゆる「西北歴史論争問題」という形で半世紀以上も断続的に続くのだが、その詳細は事後の「歴史認識」を論ずる次章に回し、ここでは劉志丹の最期についてのみ触れておこう。

1935年11月末に釈放された劉志丹はその後、同年暮れに新たに編成された紅28軍の軍長に任命され、翌年2月に始まった中共軍の山西遠征（いわゆる「抗日東征」作戦）に同軍を率いて参加した。新編の28軍（兵力1200ほど）は、装備も練度も不十分であったが、劉はたびたび前線に赴いて陣頭指揮にあたった。だが、かれが軍人としての本領を発揮できた期間はあまりにも短かった。4月14日、おりから山西省中陽県の三交鎮に挺進しようとしていた28軍の前線視察のさなかに、劉志丹は流れ弾に当たり戦死してしまったのである。時にわずか32歳、いくたの伝説を残した革命家のあまりにもあっけない最期であった。遺骸は中共中央の所在地であった瓦窑堡に鄭重に運ばれ、4月24日に盛大な追悼大会が催された。その後、同年6月に中共中央はその生地である保安県を志丹県と改名することを決定、1941年にはその志丹県城に劉志丹の陵墓が造営された（2年後に竣工）。今日、その墓所は「劉志丹烈士陵園」（全国重点烈士紀念建築物保護單位）となっており、「群衆

領袖、民族英雄」という毛沢東の題辞（1943年の公葬典礼のさいのもの）を刻んだ碑などが並んでいる。

### Ⅲ 歴史認識の世界

---

前章で述べたように、中共の西北革命根拠地の歴史は、劉志丹・高崗らと謝子長・閻紅彦・郭洪濤らとの軋轢・反目に彩られながらも、中共中央の陝北到達、そしてそれに前後する謝子長と劉志丹の死去によって、一つの区切りを迎えた。だが、このひとつの歴史の終わりは、西北革命根拠地の歴史を如何に評定するかという次なる論争の幕開けを告げるものでもあった。

西北根拠地の歩みが、単なる一地方の革命運動の総括以上の意味を持ったのは、その西北根拠地が1936年以降、一転して中共中央の新たな地盤となり、それまで西北で活動してきた在地党幹部が党中央の活動の重要な部分を担うようになったからである。西北幹部を中央の活動にどのように組み込んでいくのか、そのさいにそれまでのかれらの経歴をどのように評定するのか、これらは必然的に西北革命根拠地の歩みをどう認識して功過を判定するのかという「認識」の問題を浮上させたのである。

「認識」の問題は、「史実」の問題以上に錯綜した経緯をたどった。そして、小説『劉志丹』事件の光と影においては、「史実」に見える西北幹部間の軋轢・対立が第一の光源だとするならば、この「認識」の推移に伴う評定の転変こそが第二の光源となるのである。

#### 1 評価の第一段階（1935–1938年）

劉志丹、高崗らを処刑寸前にまで至らしめた1935年秋の肅清禍が、中共中央の陝北到着によってかろうじて食い止められ、肅清に直接の責任ありとされた二人に処分が行われたことは前章で述べたところである。だが、中共中央（主には張聞天、李維漢ら）が主導したこの処分は、その後の陝北の現地党の活動、および中央幹部と地方幹部の關係に大きな禍根を残した。

まず第一に、処分が右派・右傾に対する肅清そのものは正しかったという基本認識に立脚していたため、旧陝甘辺特委（26軍）幹部に被せられた「右傾日和見主義」というレッテル自体は、その後もそのままにされたことである。それゆえ、処刑を免れた肅清被害者の多くは、釈放後の処遇において、懲罰的な待遇や人事配置を命じられることになった<sup>(74)</sup>。前述のとおり、劉志丹は釈放後に28軍を率いて前線に赴き戦死したが、戦死直後もその幹部档案においては、「嚴重右傾」というレッテルを貼られたままだったという<sup>(75)</sup>。さら

に言えば、劉の死自体も、軍長自らが前線での敵情視察という危険を冒したゆえの戦死だったため、一部幹部からは「かれは汚名を雪ぎ、自分が特務とやらではないということを証明するために、むしろ進んで敵陣に突撃して果てようとしたのだ」という声もあがるほどであった<sup>(76)</sup>。もって、釈放後も雪がれなかった「右傾日和見主義」の汚名が、劉志丹らにとって、如何に重くのしかかっていたかをうかがうことができよう。

禍根の第二は、1935年末の肅清是正が、肅清の直接の責任者二名（戴季英、聶洪鈞）を処罰したに止まり、組織面で当然に責任を問われるべき朱理治、郭洪濤、および旧25軍指導者（程子華など）は、処分を免れたどころか、その後も重用され続けたため、肅清の被害者であった旧26軍関係者の強い不満を引き起こしたことである。いわば、旧25軍、27軍は、旧26軍関係者を相も変わらず「右傾分子」と蔑視し、他方で旧26軍関係者はかつて肅清に手を貸した者たちが反省もなくのさばっていると見たわけである。1935年12月末に、毛沢東、周恩来が旧25軍の幹部にたいして、旧26軍の人士への蔑視、偏見を捨てよう教育しなければならないと指示した背景には、まさにそうした事情があったのだ<sup>(77)</sup>。

張策（旧26軍幹部）の説明によれば、当時の中共中央が肅清の誤りについて、全面的な是正ができなかったのは、肅清運動を引き起こした張本人の一人である郭洪濤が、中共中央に陝北の状況を報告したさいに、事実を曲げて伝え、おのれの罪過を覆い隠したから——つまり、中共指導部を騙したからであるという<sup>(78)</sup>。張はこのほかにも、1937年5月に行われた中共陝甘寧辺区第一次代表大会（15-17日）で委員の選挙が実施されたさい、郭洪濤の策謀で候補者名簿に旧26軍関係者が掲載されず、旧26軍関係者がこれに不満をもっていたこと、同大会で区委書記に選出された郭が、その際も肅清を正当化するパンフレットを配布していたことを憎しみをこめて証言している<sup>(79)</sup>。張の説明にはそれなりの道理はあろうし、他方で陝北に着いたばかりの党中央が現地の状況をすぐには把握できず、それらを単なる地方幹部同士のいさかいに過ぎないと見なしたということは当然にあり得る。

しかしながら、同時に考慮すべきは、1935年末に陝北肅清事件の直接の処理にあたったのが、毛沢東ではなく張聞天や李維漢であったという事実である。すなわち、過去に陝北・陝甘辺区で起こった同志間の対立や肅清などは、それらが——形式的にはあれ——党中央の意向や路線を背景として行われたものであるがゆえに、張聞天らが主持したかつての中央の路線問題の是非を論ずることなく、それのみを切り離して解決できる性質のものではなかったのである。それは、1935年末の肅清事件の事後処理についても同様であった。つまり、張聞天らの抱える歴史問題、すなわち1935年以前における中共中央のいわ

ゆる「路線の誤り」の問題について、しかるべき総括がなされる以前にあっては、1935年末の肅清事後処理を含む西北革命根拠地の歴史問題を全面的に見直すことは、事実上不可能だったわけである。

こうした事情について、毛沢東はかつて、「洛甫〔張聞天〕同志が総書記に留まっているという状況のもとでは、正しく肅清の問題を解決することはできなかった」と述べ、さらに郭洪濤や朱理治といった肅清の責任者がその後も重用されたことについても、「洛甫同志の人材起用は不当だった」と語ったという<sup>(80)</sup>。かくて、西北革命根拠地の歴史評価の見直し作業は、1930年代末から毛沢東が本格的に取り組みはじめた党中央の路線問題の歴史的総括の作業——これがいわゆる1940年代前半の「延安整風運動」の核心的部分であり、その集大成が1945年に採択された中共の「若干の歴史問題についての決議」である——にリンクする形で進められていくことになった。

ちなみに、劉志丹らに貼られていた「右派」、「右傾解党主義」のレッテルの見直しは、高崗、張秀山ら旧26軍関係者の強い働きかけもあり、1938年初めまでにかなり進展があったようである。1938年2月に延安城外の藍家坪で開かれた中共中央の会議では、劉志丹をなおも「右派」と呼ぶ郭洪濤らにたいする批判がなされた結果、郭は陝甘寧辺区委書記のポストから更迭され（後任には高崗が就任）、それまで26軍関係者に貼られていた「右派」、「右傾解党主義」のレッテルを原則的にはずすことが決定されている<sup>(81)</sup>。

## 2 評価の第二段階（1942–45年）

西北革命根拠地の歴史問題（評定）にとって、大きな区切りとなったのは、「延安整風運動」のさなか、1942年10月19日から翌年1月15日まで、89日間にわたって延安で開かれた中共西北局高級幹部会議（以下、適宜「西北局高幹会議」と略称）である<sup>(82)</sup>。

1938年以来、中共上層部においては、毛沢東の主導する党中央の歴史の見直し作業（党内論争）がなされていたが、1941年9月に断続的に開かれた中共中央政治局拡大会議（俗に「九月会議」と呼ばれる）における激しい議論と一部指導者（張聞天、秦邦憲、任弼時ら）の自己批判を経て、1942年には、いわゆる「ソヴィエト後期」の党中央の極左政策が、事実上「路線の誤り」であることが、党中央指導者のレベルで基本的に確認されていた。簡単に言えば、中国農村の実情に即した毛沢東の革命路線が正しく、それを抑圧した1930年代の中共中央の路線は「左傾」の誤りだったという合意が形成されたのである<sup>(83)</sup>。

だが、当然に事は中央の議論のレベルで決着するものではない。張聞天ら党の旧指導部の自己批判を引き出すことに成功した毛沢東の次なる課題は、この新たな歴史認識を如何にして全党に拡大していくか、そしてこの認識を如何なる具体的な歴史事例にあてはめ、



その正しさを検証していくかに移っていくことになる。いわゆる「西北歴史問題」はその作業に格好の素材を提供するものであり、「西北歴史問題」に決着をつける場として措定されたのが、42年末の「西北局高幹会議」にほかならなかった。

おりから1938年以降、「西北歴史問題」の当事者でもある高崗は、陝甘寧辺区の現地幹部の代表格として、毛沢東の抜擢・庇護のもと、党内地位を累進させ、1941年には中共西北局書記にまで栄進していた。1942年の「党の作風を整えよう」の中で、毛は中央幹部と現地幹部の軋轢に言及した際、特に高崗の名を挙げ、「陝北の実情理解にかんして、陝北人民との結びつきにかんして、わたしは高崗同志らよりもずっと劣っている」とまで述べている<sup>(84)</sup>。西北現地幹部における高崗と郭洪濤の地位は、いまや完全に逆転しており、「西北局高幹会議」自体が、西北局を代表する高崗と中央を代表する任弼時の二人によって主宰されたのであった。

「西北局高幹会議」の準備作業は1942年8月に開始されたが、それと前後して中共中央は、過去の肅清（肅反）工作全般を総括するための作業に着手していた。1942年2月28日に設立された「内戦時期肅反工作総結委員会」（主任は康生、副主任は鄧発）や4月11日に任弼時が召集するよう求められた「陝北肅反総結委員会」などはその一例である<sup>(85)</sup>。「陝北肅反総結委員会」において任弼時は、「1935年の陝北（陝甘辺及び陝北を含む）肅清問題の再審査にかんする中央の決定」草案を起草し、それを来るべき西北局高幹会議の議事に入れる準備を進めていた<sup>(86)</sup>。すなわち、肅清問題を含む西北革命根拠地の歴史問題は、つとに中共中央によってあらかじめ西北局高幹会議の重要議題のひとつとして指定されていたわけである。

1942年10月19日から三カ月近くにわたって開催された西北局高幹会議は、会期の長さや出席者の多さ（260人余り、傍聴者も加えると500人近く）もさることながら、党中央の指導者（会議主宰者の任弼時、高崗のほか、毛沢東、朱徳、劉少奇、陳雲、彭真など）が多数出席し、積極的に発言したことにおいても、地域レベルの党幹部会議としては、異例の規模、格付けのものであった。そして、この会議で最も激しい議論が闘わされたのが、11月5日より十日以上にわたって行われた西北革命根拠地の歴史問題をめぐる議題であった。

11月初めに陝甘辺区の歴史問題が討議されると、1935年の肅清問題はただちに議論の焦点となった。積極的に発言に立ったのは、果たして肅清被害者の張秀山、習仲勳、張邦英、劉景範ら旧陝甘辺特委（紅26軍）の幹部たちであり、かれらは会議主宰者たる高崗の差配のもと、多くの実例・体験を挙げて郭洪濤、朱理治らの悪行を指弾した。とりわけ、「肅清」の真相に言が及ぶと、かれらの言辞はいっそう激情を帯び、容易に制止しがたい

怒号へとヒートアップしたため、後年の文化大革命のいわゆる「大批判」を思わせる情景が繰り返されたという<sup>(87)</sup>。一方、任弼時、高崗ら会議の主席団は、そうした激しいやりとりを敢えて制止せず、むしろ時々「左傾」時期の陝北党の歴史文献を参会者に配布し、「正しい路線」と「誤った路線」の是非を西北根拠地の実例と結びつけて議論するよう誘導している。党の文献を持ち出して過去の路線の誤りを批判するというこうした手法が、1940年に『六大以来』を編纂して歴史問題清算の突破口とした毛沢東のそれを踏襲していることは、火を見るよりも明らかであろう。

朱理治、郭洪濤、および戴季英、聶洪鈞ら肅清の「主犯」たちは、西北局高幹会議の準備作業の段階で、すでに批判対象となることが決まっており、嵐のような大批判を逃れることはできなかった。かれらは罪過が指摘されるたびに、多くの参会者の面前で弁明をさせられたが、かれらの声はしばしば会場からの厳しい叱責にかき消され、時には「正直に答えろ！」という罵声が浴びせかけられた<sup>(88)</sup>。1935年秋の肅清運動の中で、言語に絶する迫害・拷問を受けた被害者の心情を察すれば、この会議がこのような報復の雰囲気にも包まれたことも、無理もないことだったかも知れない。

批判大会の様相を帯びた討論が、朱理治、郭洪濤らの全面的屈服、謝罪で終わった後、11月17、18の両日、高崗が西北局を代表して「辺区党の歴史問題検討」<sup>(89)</sup>と題する長篇の演説（三万字余り）を行い、陝北（陝甘辺）の歴史問題について、次のように結論を下している。

- (甲) 辺区の党の歴史上の論争は「路線の論争」であり、劉志丹、高崗を代表とする正しい路線と杜衡（元中共陝西省委書記、のちに脱党）から朱理治、郭洪濤に至る左傾日和見主義路線とはあらゆる問題において、あい対立していた。
- (乙) 陝甘党内の左傾日和見主義は全国的な性質を帯びていた。その政治面での来源は、九一八事変後の党内の閉鎖主義（関門主義）と「一切を打倒する」という誤った政策であり、その組織面での来源は、教条主義的な幹部政策であった。
- (丙) 過去の誤りは、単なる路線問題ばかりでなく、個人の資質の問題でもある。路線の誤りが肅清の誤りへと転じるにあたって、その大きな鍵となったのは、人間関係の問題であり、朱理治、郭洪濤の劣悪なる個人的資質が引き起こしたものであった。彼らは個人主義の野心家であり、陰謀家であった。これに対して、劉志丹は一貫して正しい路線を実行したボリシェヴィキの典型であった。

かかる結論に基づき、高崗は最後に、「過去の誤った肅清の中で無実の罪を着せられた

すべての同志に対してその冤罪を晴らし、かれらに付けられた“日和見主義”のレッテルを取り消すこと」、「肅清の中で逮捕された同志は“右傾解党主義であり、革命に反対する自由主義である”と見なす以前の決定を取り消すこと」を提起した。

高崗のこの報告は、その内容からみても、例えば「左傾日和見主義」に関する言い回しやその来源についての断定しかり、また「正しい路線」と「誤った路線」の一貫した対立・闘争を軸とする枠組みまたしかり、まさに毛沢東が党中央の「左傾日和見主義」について述べた内容と完全に一致している<sup>(90)</sup>。さらに高崗は、辺区党内の「左傾日和見主義」が全国的な性質を帯びていたこと、言葉を換えて言えば、辺区の党の歴史に現れた路線闘争は全党の路線闘争の縮図であったとも指摘している。当時、高崗は現地幹部の代表として、党内でかなりの権威を持っていたとはいうものの、中共の組織原則から常識的に考えるならば、中央の指導者の同意を得ないまま、かれが全党の路線闘争についての断定的見解を独自に公言することはあり得ない。かつまた、量的に三万字余りに達し、内容も系統だっているかれの報告は、とても短期間のうちに準備できるようなものでもなかった。こうした事実が物語るのは、中共中央の指導のもとで開催された西北局高幹会議で高崗が行ったこの報告は、間違いなく事前に中央指導者（毛沢東、任弼時）の審議と同意を経たものであり、それも会議で西北歴史問題に関する討論が開始される以前の段階で、すでに基本的には出来上がっていたはずだということである。

高崗の報告に基づき、中共中央は会議開催中の12月12日に以下のような内容の「1935年の陝北（陝甘辺及び陝北を含む）肅清問題の再審査にかんする中央の決定」を採択した。

陝甘寧の党高級幹部会議における陝北歴史問題に関する審査と結論に基づき、中央は次のように考える。1935年9月から10月にかけて朱理治、郭洪濤らの同志が主導した「肅清」は、陝北ソ区と紅軍の創始者である劉志丹、高崗、張秀山、楊森らの同志を逮捕し、さらに二百人以上の党、政、軍の幹部を殺害したが、党の最良の幹部を反革命分子だと誣告してこのように逮捕、殺害したことは、全くの誤りであるに止まらず、革命に対する罪悪でさえある。<sup>(91)</sup>

この決定によって、陝北の肅清の主犯は従来の戴季英、聶洪鈞から、朱理治、郭洪濤へと拡大し、さらに朱・郭の二人は、「個人主義で、強い領袖志向と政治野心家としての劣悪な資質」の持ち主と断定されたのだった。他方、劉志丹や高崗らは、「一貫してポリシェヴィキにふさわしい立場と態度を持ち続けたが、それは我が党の同志が学習し、見習うに値するものである」と、最大級の賛辞が呈せられた<sup>(92)</sup>。

西北局高幹会議において、誤った路線の代表者にして陝北の肅清の責任者とされた郭洪濤、朱理治は、会議の場で自己批判を迫られたが、会議が下した結論、とりわけかれらを肅清の張本人と断定する結論には——口こそ出さないものの——当然に強い不満をもっていたようである。かれらにしてみれば、西北局高幹会議とは、党中央の抜擢によって急に羽振りの良くなった高崗を頭とする旧陝甘辺派が、肅清の被害者（そして劉志丹の後継者）であることを逆手にとって、自らを完全無欠の革命家に仕立て上げ、他方かつて彼らと対立した自分たちに一切の咎を押しつける一方的な裁定の場であった。

郭洪濤らは会議の後、特に整風運動（搶救運動）において、自らの歴史問題が事ごとに蒸し返される状況の中で、上級組織および任弼時などの中央の指導者に対して上申書を送り、会議の決定のうち、いくつかの事実認定については、同意を保留するむねを伝えている<sup>(93)</sup>。しかしながら、一つには毛沢東ら中共中央の信任のもと、当時の高崗がその威信と地位とを確立させていたため、そして二つには、西北局高幹会議での歴史問題についての諸決定の基本線が、中央レベルで策定されたものであり、さらにはその後の「若干の歴史問題についての決議」（1945年）にとって重要な基礎となっていたため、かれらの保留意見は、上層指導者の批判（まだ悔い改めずに、言い逃れをするのか！）を受けこそすれ、その理解を得ることは決してなかった。

「若干の歴史問題についての決議」が採択された直後の1945年6月末から8月初めにかけて、延安では党中央の指導者と西北歴史問題の当事者を集めた「西北歴史問題座談会」が開催された。この座談会は、西北局高幹会議での裁定や事実認定に不満を持つ者（例えば、郭洪濤、閻紅彦ら）がなお一部にいたため、かれらの異論を批判し、同時に西北局高幹会議で詰めきれなかった細かい事実関係の認定を行うために招集されたものだった<sup>(94)</sup>。任弼時、陳雲も参加したその会では、郭洪濤らの誤りが改めて指摘され、郭にたいしては、「最終嚴重警告処分」が下され、これ以上「翻案」を図るようなら党から除名するという警告が言い渡されたという<sup>(95)</sup>。また、この座談会では、西北革命根拠地の指導者の序列についても議論がなされた模様である。先の西北局高幹会議では、1935年の肅清問題が最大の争点であったため、その前史にあたる謝子長と劉志丹との間の対立や内部抗争については、特に踏み込んだ議論はなされなかったが、西北歴史問題の全般的検討をしたこの座談会では、劉や謝の歴史的地位についても、踏み込んだ裁定がなされたのであろう。座談会では、当初の序列は「謝子長—劉志丹—閻紅彦」だったものが、討議を経て「謝子長—劉志丹—高崗—閻紅彦」になり、さらに高崗の地位に配慮して「高一劉—謝」に、そして最終的には「劉—謝—高」になったといわれている<sup>(96)</sup>。

ちなみに、謝子長の片腕だった閻紅彦は、1935年の肅清事件の当時は国外にいたため、

その責任を問われることはなかったが、劉志丹、高崗との旧怨があったため、高崗が羽振りを利用しては、その「功績」が認められない状態だったのである。高崗に排される形で功績者の序列から追われた閻は、それを不服とし、高崗の「旧悪」を党中央の指導者にひそかに訴えたいが、それは前述の郭洪濤の保留意見同様、西北革命根拠地の「正しい路線」を代表する高崗が権勢の座にある限り、指導者への不当な誹謗と見なされるだけだった<sup>(97)</sup>。西北革命運動の真の指導者は、劉志丹や高崗ではなく謝子長や自分だと考える閻の姿勢は、のちの小説『劉志丹』事件の重要な伏線となっていくことになる<sup>(98)</sup>。

かくて、習仲勳、劉景範、張秀山といった、それまでの活動歴の面で劉志丹、高崗に近い関係にあった旧紅26軍（陝甘辺特委）系列の幹部は、西北局高幹会議の後、中央と高崗の引き立てもあり、辺区の党政機関の重要職務を担うことになった。これに対して、朱理治、郭洪濤はあらゆる職務からの解任と中央党校での学習という処分を受け、またかつて謝子長、郭洪濤の下で活動した旧陝北特委系統の幹部たち（閻紅彦ら）は、高崗の怨恨に由来する不当な人事的報復を受けたと言われている<sup>(99)</sup>。今や、歴史認識の転換により、1935年末とはちょうど反対の人事異動が起こったわけである。

### 3 評価の第三段階（人民共和國期）

中共中央の直接の指導下に開催された西北局高幹会議と、それに続く1945年の「西北歴史問題座談会」は、西北歴史問題に対して、権威ある、そして是非明瞭なる裁定となった。今一度、その裁定を略記するならば、西北の革命運動において、一貫して「正しい路線」を執行したのは、劉志丹、高崗らの現地黨員であり、それを妨害、圧殺、はては肅清しようとした「誤った路線」を代表するのが、朱理治や郭洪濤らであった。そして、「正しい路線」を執行した現地黨員の代表は、何よりもまず劉志丹、高崗らであり、次いで謝子長らだというのがその歴史認識の骨子であった。この歴史認識は、中共の「若干の歴史問題についての決議」が、1953年に『毛沢東選集』第3巻に収録されて初めて公表されたさい、「“左”傾路線がもたらした陝北革命根拠地の危機」という決議の一節にたいしてつけられた以下の注釈によって、党（毛沢東）の公式見解となった。

1935年秋、“左”傾の誤りを犯した朱理治同志は、中央代表の名目で陝北革命根拠地（陝甘辺と陝北を含む）に赴き、もともと同地で“左”傾の誤りを犯していた郭洪濤同志と結託し、“左”傾日和見主義路線を政治、軍事、組織といった各方面の活動で貫徹した。さらに、正しい路線を行い、陝北の紅軍と革命根拠地を作り上げた劉志丹、高崗らの同志を排斥した。次いで〔朱と郭は〕、反革命の肅清工作において、正しい

路線を執行する多くの幹部を逮捕するという極めて誤った行いによって、陝北革命根拠地の深刻な危機をもたらした。<sup>(100)</sup>

すなわち、陝北の革命運動において「正しい路線」を行い、「紅軍と革命根拠地を作り上げた」のは、劉志丹、高崗らであるという歴史認識がここに広く世に示されたのである。

しかしながら、この決議が示した「正しい路線」と「誤った路線」との闘争を軸とした歴史解釈のモデルは、それが「正しい路線」や「正しい者」の高みから複雑なる歴史事象の一切を正邪に裁断するという審判の色あいを濃厚に帯びていたがゆえに、致命的な問題をはらんでいた。「正しい路線」の執行者に一旦変動が生じると、関連する歴史評価の基準もそれに伴って変動してしまうという問題点である。すなわち、前述の「辺区党の歴史問題検討」や「歴史決議」の注釈は、すべて「劉志丹、高崗がこれまでとってきた路線は一貫して正しいものだった」ということを大前提にしていたわけだが、それゆえに高崗の政治的立場に変動が生じると、西北歴史問題の評価や裁定のすべてが、それに連動する形で一転再転することを余儀なくされるのである。それは、早くも『毛沢東選集』出版の翌年に高崗が失脚、自殺することによって、現実のものとなってしまふ。

1954年にいわゆる「高崗、饒漱石反党集団」が摘発され、その処分が「高崗、饒漱石反党聯盟にかんする決議」（1955年3月）という形で公布されると、いわゆる「西北歴史問題」にかんしては、二つのことが相次いで進行した。ひとつは、高崗を中共の歴史から抹殺する作業である。具体的には、それ以後に刊行された『毛沢東選集』諸版において、前述の注釈から「高崗」の名が削除されていることを挙げることができる<sup>(101)</sup>。

そして、もう一つは、1955年4月に中共の指示のもとで「陝北歴史と高崗問題」に関する座談会（彭徳懐、馬明方が主宰）が北京で召集されたことである。座談会に参加したのは、朱理治、郭洪濤、程子華、聶洪鈞、閻紅彦、馬文瑞、劉景範らいわゆる「西北歴史問題」の当事者たち40-50人であった<sup>(102)</sup>。この座談会にかんする詳しい記録は公表されていないが、会のねらいが、高崗の不正な経歴、過去の行状をあばくこと、そしてそれによって「西北歴史」の修正をはかることにあったのは、ほぼ間違いない。高崗の不正摘発について言えば、閻紅彦はかねてよりの高崗批判をこの場で再度持ち出している<sup>(103)</sup>。座談会では、高崗の経歴に大きく関わる1935年の肅清事件と1942年の西北局高幹会議の下した裁定にも当然に議論が及んだ。だが、少なくとも1935年の肅清について言えば、高崗が劉志丹、習仲勳、劉景範らと共に、誤った肅清の被害者の側にあったことだけは争えない事実であったため、座談会も「辺区党の歴史問題検討」の結論自体をくつがえすには至らなかった模様である。ただし、肅清事件に関する細部の具体的な事実認定、例えば肅清に

至る背景や肅清の経過、肅清首謀者の関与の程度などが、当事者双方の出席のもとで再検討された<sup>(104)</sup>。その結果、1942年の裁定の中で十把一絡げに朱理治、郭洪濤らの非とされていた罪状のうち、いくつかについては、主に郭洪濤や朱理治らの誤りのレベルをやや緩和する方向で、事実認定の調整が図られたようである。

高崗が失脚・死亡したことによって、それまでの「西北歴史」像が根本から覆ったわけではなかったが、それを機にかつて高崗らによって（正確に言えば、高崗の認識を肯定した中共中央によって）虐げられてきた者たちの名誉回復がその後起こったのは、ある意味では当然のことであった。例えば、陝北の肅清の主導者とされた朱理治と郭洪濤は、1956年以降、党の中央監察委員会に対して、西北局高幹会議の結論を再検討するよう求める上申書を提出し、1959年11月には中共中央監察委員会が、両人の歴史問題にかんする1942年の裁定を一部見直す再審査の意見書<sup>(105)</sup>を中共中央に送っている。閻紅彦が、毛沢東から「十数年にわたって君に不当な扱いをしてしまって、すまなかった」という謝罪の言葉をかけられたのも、このころ（1958年）のことである。他方で、劉志丹・高崗の人脈に連なる中共幹部——とりわけ高崗の「五虎将」と呼ばれた張秀山、張明遠ら——が、傍目にはあきらかに連座と映るような降格処分を受けるということも、この時期に並行して起こっている<sup>(106)</sup>。本稿第I章でその経過を述べたように、小説『劉志丹』事件は、まさにこうした全般的状況の中で起こったのであった。

小説『劉志丹』事件そのものの経緯と文革後の名誉回復については、すでに述べたところでもあるので、繰り返すことはしないが、「西北歴史問題」自体について言えば、文革の終息といわゆる改革・開放時代の到来は、論争の終息を意味しなかった。文革を生き抜いた「西北歴史論争問題」の当事者たち、すなわち肅清首謀者とされた人物とその迫害を受けた側の人物とが、それぞれの立場から回想録を発表し、再び自己の正当性を主張し始めたからである<sup>(107)</sup>。両者の紛糾はエスカレートし、ついには一部の当事者（主には郭洪濤の回想録の内容に不満を持つ旧陝甘辺特委関係者）が中共中央にたいして、この問題に介入するよう求める事態にまでなった。1983年のはじめのことである。1983年4月、中共中央は、李維漢、王首道、馮文彬、榮高棠、何載の5人からなるグループにたいして、歴史認識を統一して紛糾に終止符を打つべく、再度双方の当事者たちを集めて会議を開くことを命じた。かくて、旧陝北特委（27軍）と旧陝甘辺特委（26軍）の関係者がそれぞれ4名ずつ召集され、1983年に座談会（4月11日～6月20日）が開かれたのである<sup>(108)</sup>。関係者を集めた座談会としては、1945年、1955年のそれに続く三回目のものということになる。

出席者の一人である賀晋年の語るところによれば、座談会では出席者たちが長年の胸のつかえをぶちまけるように激しい議論の応酬を繰り広げたため、会はあたかも延安整風が

再演されたかのような様相を見せたという<sup>(109)</sup>。「整風」式の激しい議論の後、そして李維漢の苦心の調停<sup>(110)</sup>の結果、論争の当事者双方は、いくつかの原則問題について、何とか共通認識に達すると同時に、それ以後、党内の団結に支障を及ぼしかねない全ての論争を全面的に停止することを申し合わせた。旧陝甘辺特委側の関係者によれば、郭洪濤はこの合意内容に最後の最後まで抵抗したが、そのかれも李維漢の懸命の説得を受け、最終的には同意の署名をせざるを得なかったという<sup>(111)</sup>。李維漢ら5人グループ(五人小組)は、座談会の結論に基づき、中共中央に対して、「西北歴史争論問題の解決に関する分析と方針」なる報告書<sup>(112)</sup>を提出、これを受けて中共中央は1983年7月13日にこの報告に同意すると共に、「『五人小組の西北歴史争論問題の解決に関する分析と方針』を印刷配布することに関する通知」(中共中央[1983]28号文件)を出して、ようやく半世紀近くにわたるこの論争の終結を宣言したのだった。この通達は基本的に1942年の西北局高幹会議の下した結論を是認した上で、厳かに次のように告げている。

歴史問題についての論争は、全局に立って根本の面から見なければならない。路線の是非については、それをはっきりとさせなければならないが、その他の多くの具体的問題にかんする意見の相違に、これ以上こだわり続けてはならない。……党の歴史を研究、検討するさいには、歴史唯物主義の態度をしっかりと持ち続けなければならない、全局〔の立場〕から出発せねばならない。党の歴史決議、および文献と異なる見方や意見がある時には、中央、あるいは中央がその権限を授けた機関による審査を経た後に発表しなければならない、軽率に公開の論争をすることは許さない。<sup>(113)</sup>

すなわち、この通達は、党内の団結・融和を優先させる見地から、西北歴史問題について関係者がこれ以上の議論、論争をすることを原則禁止するものに他ならなかった。この通知が重い意味を持つのは、これがその後1986年に西北歴史問題について補足制定されたもう一つの党内通達<sup>(114)</sup>と共に、西北革命運動の歴史に関する著述の重要な準則となっただけでなく、以後の中共党史の著述全般が、論争の続く類似の問題を処理するさいに遵守すべき準則となったことである<sup>(115)</sup>。後述するように、李建形の『劉志丹』の新版は、1986年に再び発行停止処分を受けることになるが、それは、同小説がまさに上記の中共中央の文件の精神に違背すると認定されたからだった<sup>(116)</sup>。この通達は、その全文が公開されていないこともあって、中国近現代の政治史、革命史を研究する者(特に中国国外の研究者)にも、ほとんど知られていないが、その影響力は単なる西北の革命史にかんする著述規定を超える巨大なものなのである。



党の正式通達が1980年代半ばに「西北歴史論争問題」に最終結論を下したことにより、以後に出版される西北革命運動史は、この通達の基本線に沿って記述されることになった。また、関係者の回想を収めた劉志丹、謝子長にかんする資料集も、この通達の趣旨にのっとり、適宜もとの原稿に修正を加えた上で関連資料を収録するという措置をとっている<sup>(117)</sup>。言うまでもなく、こうした措置は、収録資料が事後の公式評価に沿うように書き換えられているという本末転倒ともいえるべきものであるから、資料集の信頼性そのものをないがしろにし、ひいては党史研究全般をも困難にする一種の暴挙にはかならない。いわば、「西北歴史問題」においては、そうした暴挙をあえてしても、無用な論争の芽を摘むことが優先されているのである。

だが、こうした「超」歴史的措置にもかかわらず、70年来の論争は実は今にいたるもやまってははいない。とりわけ、長らく「陝北の肅清の首謀者」と呼ばれ続けた郭洪濤は、2004年のその逝去の直前まで、自分は「肅清の主導者ではないし、劉志丹らの同志に無実の罪を着せて陥れる意図は全くなかった」<sup>(118)</sup>と語り続けたし、他方、肅清の被害者の一人である張策は、郭のこうした「評価を覆そうとする言動」(翻案活動)に我慢がならず、晩年に二冊の著作<sup>(119)</sup>を出版して、あくまでも郭の責任を追及し続けた。厳密に言えば、こうした言論活動は、「路線の是非については、それをはっきりとさせなければならないが、その他の多くの具体的問題にかんする意見の相違に、これ以上こだわり続けてはならない」とする前出の中共中央(1983)第28号文件の精神に抵触するものであろう。

さらには、「西北歴史論争問題」から派生するいくつかの問題(例えば、1935年の肅清運動の具体的な犠牲者数や小説『劉志丹』事件の背景や首謀者)については、事件当事者の遺族やかつての部下たちが、なおも「真相」をあきらかにしようとしている<sup>(120)</sup>。1935年の肅清体験とその後の党の歴史認定によって、加害者(誤った路線)と被害者(正しい路線)とに分かたれた両者の拭いきれないわだかまりは、単なる「1935年の誤った肅清は、王明“左”傾路線の産物であり、王明“左”傾路線の主観主義およびセクト主義の悪性膨脹の産物であった」(「西北歴史争論問題の解決に関する分析と方針」というようなありきたりの解釈で解消されるものではなかったことが見てとれよう。そしてまた同時に、こうした歴史問題の紛糾は、その当事者たちの執念もさることながら、その源をたどれば、延安整風時期に確立した「正しい路線」と「誤った路線」の闘争、つまり正邪の争いを基調とする歴史総括のモデルにあるということも明らかであろう。付言すれば、「西北歴史論争問題」の影の主演である高崗については、近年その名誉回復がしばしば噂され、より具体的には習仲勳の子息である習近平(現国家副主席)の「上台」次第では、高崗の名誉回復があり得るといような期待もある<sup>(121)</sup>が、権力の座にある人物が変われば、かつ

での「誤った路線」も「正しい路線」になりうるという思考回路自体が、旧態依然のものであることは、言うまでもなからう。

#### IV 小説の世界

---

前三章の論述によって、小説『劉志丹』事件の経緯とその歴史的背景については、おおむね明らかにしたが、最後に欠かしてはならないのが小説そのものの分析である。すでに述べた通り、この小説には「文字の獄」を引き起こした1962年の版（一部分が報刊に掲載されただけで、全体は出版されず）、名誉回復ののちにそれを一部書き改めた1979年版（上巻のみ、工人出版社より刊行）、そしてさらにそれを大幅に書き直して文化芸術出版社から1984-85年に刊行された新版（全3巻）という、つまり同作者、同タイトルの三つの版が存在する。だが、前二者については部分的にしか発表されておらず、また後者も1986年に発行停止処分を受けたため、この小説を通読した者は極めて少ないのが実情である。それゆえに、それら三種の違いがどのようなもので、その違いがどのような由来によるものか、そして新版が何ゆえに発行停止に追い込まれたのかについては、見るべき研究がない。いわば、この小説は事件ゆえにその名を知られているものの、その中身については、ほとんど論じられてこなかった不遇な作品なのである。

##### 1 『劉志丹』1962年版と1979年版

小説『劉志丹』は、当初登場人物がすべて実名で登場する伝記体として執筆されたものが、その第三稿から、登場人物の多くが仮名となる小説体に変更され、その後第六稿の一部が、1962年に『工人日報』『光明日報』『中国青年』などの報刊に発表されたものである。その後、この小説が政治事件となったため、結局、この版の全篇が公刊されることはなかった。また、原稿自体も、1962年7月の時点で全体がすでにほぼ完成していたことはうかがわれる<sup>(122)</sup>が、下巻にあたる部分の最終稿は、なお出版社にはわたっていなかったようである<sup>(123)</sup>。

一方、1979年に工人出版社から出版された『劉志丹』（上巻、約35万字）は、4部構成からなり、第1章「少年行」に始まり、第30章の「回照金」（戦闘にやぶれた劉志丹が九死に一生を得て、1933年秋にもとの根拠地・照金にもどる）で終わっている。その内容は、1962年時点で予告された上巻の構成<sup>(124)</sup>と同じであり、基本的には、この上巻は1962年の第六稿（報刊に連載されたもの）をもとにしたものと考えてよい。ただし、一部の研究がこれを第六稿と同一視する<sup>(125)</sup>のには、若干の保留をつけなければなるまい。『工人日報』

掲載版などと比較すると、一部の人名が変わっていたり、修辞に修正が加えられていたりするだけでなく、内容の加筆、削除にも及ぶ異同がかなりあるからである<sup>(126)</sup>——もともと、例えば人名の変更によって、登場人物の正邪が入れ替わるようなものではないが。全体的に見ると、工人出版社版の方が、いくぶん詳しい描写になっており、これは李建彤が工人出版社版を刊行するにあたって、あるいはそれ以前に、旧稿に一部手を入れていることを物語っている。

なお、工人出版社版が刊行された1979年には、かつて『劉志丹』の部分掲載を予定しながら、政治的風波ゆえにそれを取りやめた雑誌『人民文学』が、『劉志丹』事件のあらましを伝える按語をつけて、小説の部分掲載を行っている<sup>(127)</sup>。『人民文学』はその「劉志丹」がどの版なのか、つまり1962年の第六稿なのか、それともこの年に改めて刊行されることになる工人出版社版なのかについて、何の説明もしていないが、内容を精査すると、工人出版社版とはかなりの異同があることが判明する。『人民文学』が掲載したのは、恐らくは同誌がかつて掲載を見合わせた1962年の原稿なのであろう。

以上を総合すると、1979年に工人出版社から出版された『劉志丹』（上巻）は、1962年までに完成し、その一部を部分的に公表した小説第六稿に若干手を入れた第七稿とも言うべきものであったとすることができる。中共中央による『劉志丹』の名誉回復が正式決定され、「かなり優れた小説である」との認定を受けたのが1979年8月であり、工人出版社から『劉志丹』が刊行されたのが10月であるから、この短い間に大きな書き直しが可能であったとは考えにくい。とりあえずは、かつて扼殺の対象とされた小説の上巻部分を、若干の修正の上で刊行し、小説と著者が名誉回復されたことを世に示すのが、工人出版社版のねらいであっただろう。完成稿に至っていなかった下巻部分の刊行が、その後工人出版社からはなされなかったことも、それを暗示しているように思われる。

ちなみに、『劉志丹』の名誉回復は、李建彤が周囲の反対を押し切ってそれを求めた結果だった。周囲の反対とは、小説を反党陰謀とする決定が、文革の以前に党の中央委員会全体会議でなされたものであり、文革中の林彪、四人組による迫害ならまだしも、それ以前の党の決定の再審を求めることは、それ自体が党への異議申し立てと受けとられ、さらなる面倒を引き起こしかねないとする懸念である。習仲勳もそうした反対意見を持っていた一人であった。習は、1977年時点で李の再審要求の動きを知った当初、李と小説の「名誉回復〔を求めること〕には同意できない。名誉回復ということになったら、毛主席にとって良くないからだ」と述べていた<sup>(128)</sup>。つまり、これは毛沢東が決めたことなのだから、それをくつがえすことは、すでに死んでいるとは言っても、毛の権威を損ねてしまうと懸念したのである。だが、小説の名誉回復は、『劉志丹』事件に連座させられた幾多の人々

を救うことに他ならないと説得された習は、その後李を支援、李もまた胡耀邦ら中央組織部の指導者たちに積極的に働きかけた結果、名誉回復が実現されたのであった。李の友人たちは多くが、党中央（毛沢東）の下した結論がまさか覆るとは思わなかったという<sup>(129)</sup>。1970年代末の状況とはそういうものだったのである。

## 2 新版『劉志丹』（三巻本）

1984-85年に北京の文化芸術出版社から刊行された『劉志丹』（全三巻）は、李建彤の語るところによれば、名誉回復を受けて1980年夏に執筆を開始したもので、1983年までには第二、三巻が書き上がり、それと並行して第一巻を工人出版社版（上巻）をもとに修訂したものだ<sup>(130)</sup>。分量は、総計100万余字である。未刊のままに終わった工人出版社版の下巻が上巻（35万字ほど）と同じ分量だったと仮定すると、総計70万字ほどだから、新版は総字数でそれを30万字も越える文字通りの大作になっている。新版の第一巻が扱う時期は、工人出版社版の上巻のそれとほぼ同じだから、1933年秋から1936年春の劉志丹の死までの二年半ほどの時期を描いた第二、三巻に70万字ほどが費やされているわけである。

1962年の時点で、すでに工人出版社版の下巻にあたる部分の原稿がかなり出来上がっていたとしても、当初35万字ほどであったはずのそれが、新版では倍に増えているわけだから、新版『劉志丹』は、旧作を面目一新した新作と言っても過言ではない。旧版と直接に比較できる第一巻だけでも、内容はかなり書き換えられており、新版には『劉志丹』事件と文革を挟んで変わっていった作者・李建彤の認識が濃厚に反映されているということが出来る。

では、旧版と新版の違いは一体どこにあるのか。両方の版ともに、革命闘争における劉志丹の英雄的事績を描いているというモチーフ自体に変わりはないが、新版では劉志丹が革命運動のなかで経験した党内闘争、仲間同士の反目や軋轢、そして劉志丹と対立した同志たちの行状が詳しく描かれているのが最大の特徴である。すなわち、いわゆる「西北歴史論争問題」でくり返し蒸し返される問題——それは旧版では慎重に避けられていた——が、仮名で登場する人物たちを通して、生々しく描かれているのである。

李建彤が新版の執筆にあたった1980年代初めほどのような時期であったか。それは前章第3節で見たように、まさに文革終結を受けて、「西北歴史論争問題」の当事者たち、すなわち肅清首謀者とされた人物とその迫害を受けた側の人物とが、それぞれの立場から再び自己の正当性を主張し始め、それが紛糾を引き起こしていた時期であった。李建彤の側の立場から見れば、かつて劉志丹を肅清しようとした郭洪濤が、自分は肅清事件の首謀

者ではないと訴え、それに夫の劉景範やその仲間たちが強く反発していた時期にほかならない。工人出版社版の刊行に編集者として参画した何家棟は、李が新版の刊行にさいして、何の協力を求めなかったこと、そして新版の執筆には「一部の老幹部たちのアドバイスがあった」ことを証言している<sup>(131)</sup>が、その「老幹部たち」こそは、郭洪濤らの動きに神経を逆なでされていた旧陝甘辺派の面々であっただろう。彼女としては、党中央によって名誉回復され、小説を評価された自分こそが、この問題に発言する資格があると感じ、さらにそれを冤罪の中で命を落とした幾多の死者たちに対して果たすべき生者の責務とみなして、この小説にとりくんだと考えられる<sup>(132)</sup>。

新版『劉志丹』の特徴的傾向を第1、2、3巻ごとに指摘する前に、この小説を論じる場合に常に問題とされてきた登場人物（仮名）と実在の人物の比定をしておく。『劉志丹』の登場人物は、劉自身とその親族、敵方の人物（例えば国民党側）については、おおむね実名で登場し、味方側の人物については、毛沢東、周恩来といった大物を除いて、基本的にはみな仮名で登場する。ただ、仮名で描かれている人物も、一対一で実在の人物に対応するわけではなく、その上、旧版と新版で登場人物の名は同じなのに、仮託されている人物が入れ替わっているケースもあり、比定は簡単ではない。また、人物比定そのものについては、李建彤自身が新版前言の中で、そうした詮索はこの小説にはなじまないと断っており<sup>(133)</sup>、筆者自身もそのような「対号入座」が文学作品の分析の正道だとも思わない。

だが、この新版がその後に発行停止処分を受けたのは、後述するように、明らかにそれとわかる登場人物（中共党員）が反面人物として描かれているゆえなのであり、また李自身が他方で小説で描かれている大事件はすべて真実であり、根拠があると述べている<sup>(134)</sup>のであるから、その比定をせずには、史実をもとにしたこの小説の特質は語れないであろう。さらに言えば、前章第3節に触れたように、「西北歴史問題」に関する中国の刊行物は、1983年の中共中央の通達以後、陝北の共産党内部の対立や抗争について、具体的に描写することを禁じられているのであるから、小説の登場人物を比定することは、この小説を歴史資料とする上でも、欠かせない作業なのである。以下に小説の旧版・新版の登場人物とモデルとなったと見られる実在の人物を、一覧表の形で示す（一部については、その根拠を示す）。

旧版（数字は人物比定の上で参考となる工人出版社版〔上巻〕での代表的登場ページ）	新版（数字は人物比定の上で参考となる文化芸術出版社版での代表的登場巻－ページ）	比定される実在の人物
謝子長	田耕 1-222、方自強	謝子長
王兆平（劉志丹の従弟）	王兆平	劉景範（劉志丹の弟）
馮蕙瓊	馮蕙瓊	李建彤 i
杜康	杜康	杜衡（陝西省委書記）
拓開寛 300	陶第寛 1-334	拓克寛
王思学 300、378	王思学 1-334、420	黄子文
王思農 378	王思農 1-420、2-30	黄子祥（黄子文の兄）
楊琪 300	楊劍 1-333	楊琪
老史 300	老師 1-334、師介人 1-337	師祝杰（師儲杰）
戴鴻遠 303	戴鴻遠 1-335、3-255、523	閻紅彦、楊重遠、呉岱峰 ii
張金 336	郭老三 1-354、張金 1-425	榮子青、李杰夫、高崗 iii
王泰吉 503	汪台基 1-134、561	王泰吉
李可夫	李可夫 2-298、391、3-30、479	李杰夫、高崗
路大昌 325	路大昌 1-355	趙連璧 iv
頼随 336、392	頼随 1-220、355、434	呉岱峰、閻紅彦 v
羅炎 508	羅炎 1-566	高崗？
	白成林 1-336	白錫林
	陳宏 1-339-342、356、2-377、3-192、484	閻紅彦、呉岱峰 vi
	申超人 2-292	郭洪濤
	郭保權 2-310	郭宝珊
	徐一知 2-345、3-496	習仲勳
	左香雲 2-377、3-192、526	尤祥齋（謝子長夫人、のち閻紅彦夫人）
	馮文方 2-396、3-600	馬明方、馬文瑞
	何鵬 2-396	賀晋年
	葛明山 2-427	張秀山
	董洪海 2-470	朱理治、聶洪鈞
	曾光 3-19	朱理治
	余勝 3-49	徐海東
	岳威 3-49	戴季英
	賀仲 3-49	程子華
	楊偉林 2-308、3-59	蔡子偉
	閻小盛 3-33	高崗
	楊冲 3-214、581	楊森
	張子發 3-188	張文華
	王秀英 2-376、3-385	史秀雲（謝子長夫人、のちに郭洪濤夫人）
	黄本 3-385、523	魯笨、李景林 vii

- i 馮蕙瓊は、新版において、李可夫の求愛を退け、王兆平の妻となる女性である。李建彤が実際に劉景範と結婚したのは1946年であった。参照：劉米拉等「懷念母親李建彤」『協商論壇』2006年第6期。
- ii 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』93頁によれば、閻紅彦と呉岱峰はともに戴鴻遠が自分をモデルにしていると思ったという。また、何家棟は「戴鴻遠」を三人の名前から一字ずつとったものと述べる（邢小群『往事回聲——中国著名知識份子訪談録』香港、時代国際出版、2005年、124頁）が、それが正しいとすれば、戴→呉岱峰の「岱」、鴻→閻紅彦の「紅」、遠→楊重遠の「遠」となる。
- iii 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』260頁。
- iv 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』75頁。
- v 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』75、262頁。
- vi 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』262頁。
- vii 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』94頁。

この表は、むろん小説のすべての登場人物（約110人余りという）を対象にしたものではなく、いわゆる「西北歴史問題」の当事者となる人物や1935年の肅清事件の関係者のみに限定したものである。また、一人の登場人物に複数の実在人物が投影されているケースや、逆に一人の実在人物が複数の登場人物に分割されているケースもあるため、推定を交えたものも含まれていることを断らなければならない。

この表でもわかるように——また、それは新版全体を通じて言える特徴でもあるが——劉志丹の最大のライバルでもあった謝子長は、旧版では謝子長の実名で登場していたが、新版では多くの場面で「方自強」という仮名になっている。また、旧版や『劉志丹』事件で問題となった「羅炎」(高崗を仮託した人物と言われたが、李建彤はそれを否定している)は、新版にも全編を通じて登場するが、その小説における役割は小さくなっており、特に生彩を放つ人物ではなくなっている。

旧版と比較した場合、新版の最大の特徴は、党内闘争でなめた劉志丹の苦難に大きな紙幅が割かれていることである。確かに旧版でも、路線闘争は描かれてはいた。ただし、党内で劉志丹を虐げる悪役の代表は、陝西省委書記の「杜康」であり、そのモデルとなった杜衡という人物が革命闘争の中で「転向」し、党を裏切るといふ顛末をたどっていたため、小説で「杜康」をあしざまに描いても、さほどの問題はなかった。これに対して、新版ではその「杜康」に加えて、劉志丹と並ぶ陝北の英雄であるはずの謝子長が、仮名ながらも、陰に陽に劉志丹と対立する人物として描かれているのである。路線闘争を描くことについては、作者の李自身も、新版の前言において、劉志丹の「十数年にわたる革命の生涯において、そのうちの7年は路線闘争の経験であり、その7年のうち5年は受難と屈辱の歩みだった」以上、路線闘争を描かずに、劉の生涯を語ることはできないと述べていた<sup>(135)</sup>。同様に、前出の何家棟も、新版では「路線闘争は削られるどころか、逆により一層突出している。以前には憚られた事柄が、今や大っぴらに論難され、躊躇することなく書かれている」と語っている<sup>(136)</sup>。

### 3 新版『劉志丹』第1巻における路線闘争

では、新版『劉志丹』において、その「路線闘争」は具体的にどのように描かれているのか。本稿第Ⅱ章で検討した西北革命運動の史実と照らし合わせるならば、新版の第1、2、3巻には、それぞれ路線闘争の具体的な事件である「三甲塬事件」(1932年2月)、「閻家窪子会議」(1934年7月)、「肅清事件」(1935年秋)が描かれているので、それを分析してみよう。

新版第1巻の第26章「究竟為什麼？」(349-360頁)は、謝子長、閻紅彦が閻討ちにも

似たやり方で劉志丹部隊を武装解除した「三甲塬事件」を描いた章である。第1巻は、それに対応する旧版（1979年の上巻）があるだけに、路線闘争の描き方が新版でどのように変わったのかを具体的に知ることができる。

「三甲塬事件」は、旧版でも第19章「転戦渭北」で漠然と記されていた。ただし、事件は、劉志丹が報告のために西安にある上級組織に行っている間に起こったことになっており、具体的に何が起こったかは明示されていない。すなわち、劉が西安から三甲塬にもどってみると、七、八百人はいたはずの部隊が二百人ほどに激減しており、劉がそのわけを聞くと、部下が、西安の上級組織から派遣されてきた「張金」なる特派員が無謀な戦闘を命じたこと、張が無能を理由に「謝子長」を追放し、さらに「頼随」をそそのかして「成分不純」なる部隊を粛清したことを報告するだけなのである。ここでは、実名で登場する謝子長が「三甲塬事件」に相当する部隊の激減、粛清とは関わっていなかったことが暗示され、さらに事件も劉のあずかり知らない状況のもと、上級組織の無謀な命令で引き起こされたように描かれているわけである。

一方、新版では「三甲塬事件」を描いた章は、構成を含めて、大きく書き改められている。すなわち、謝子長の仮名である「方自強」が、上級組織（省委）の命令を口実にして劉志丹部隊の「成分不純」「土匪的作風」を非難し、同郷の部下「頼随」「陳宏」と結託して劉部隊の乗っ取りを企むのである。さらに「方自強」は、「頼随」「陳宏」と示し合わせた上で、兵士大会で劉志丹部隊の武装解除を宣告、それを合図に「頼随」「陳宏」らは劉部隊の首領の一人「路大昌」を射殺し、あわせて無抵抗の劉志丹を監禁してしまう。射殺された「路大昌」は、劉のもとで活躍した土匪あがりの指揮官・趙連壁に相当し、殺害の手下人である「陳宏」「頼随」は閻紅彦、呉岱峰を仮託した人物にほかならない。すなわち、新版ではすべて仮名にはなっている（地名も「十苗塬」になっている）ものの、一連の出来事のすべてが、謝子長、閻紅彦、呉岱峰らによる奪権の陰謀であったと指弾されているのである。さらに、劉志丹の従弟の「王兆平」（実際には弟の劉景範）が方に抗議すると、方は「君らの側の人間はもう解散させられたのだから、君もどこへなりと行くがよい」と冷たく突き放し、王がさらに「あなたには良心というものがないのか」と訴えると、方は「いい加減にしろ。お前はもう除名されたのだから、とっとと失せろ」と言い放つのであった。

史実では、この時に監禁された劉志丹の釈放がどのようになされたか、必ずしも明らかにはされていないが、小説では、「方自強」の無茶なやり方に驚いた「郭老三」（陝西省委の特派員）が方に直談判して劉を釈放（劉はただちに省委へ報告しに赴く）したことになる。李建彤は回想では、実際に劉志丹を救い出したのは高崗だとも述べている<sup>(137)</sup>



から、小説のこの部分の「郭老三」は、高崗を仮託した人物なのであろう。高崗の描き方は、かつてかれ（を仮託したとされる「羅炎」）を登場させたことが小説の「反党陰謀」の証拠とされた<sup>(138)</sup>だけに、新版ではかなりの修正がほどこされ、高のイメージは何人かの登場人物に分散して投影されている。ある場面では「郭老三」に相当し、ある場面では「李克夫」に投影されているといった具合である。全三巻を通じて見ると、後半に行くほど「李克夫」に高崗像が集約されていくような印象が強い。「李克夫」は、当初こそ上級組織の言いなりになる鼻持ちならない幹部だが、後半では陝北に根ざした劉志丹の柔軟な闘争方針やその高潔な人柄に感化されて、劉志丹の理解者、良き同志となる人物で、それゆえに1935年の肅清事件では、劉とともに「右派」のレッテルを貼られて辛酸をなめるのである。

#### 4 新版『劉志丹』第2巻における路線闘争

次に、新版第2巻の第19章「唇槍舌剣」（286-299頁）で描かれた「閻家窪子会議」を見てみよう。1934年7月に開かれた「閻家窪子会議」は、中共北方局から派遣されて陝北にもどった謝子長とその部下・郭洪濤が、劉志丹グループと相まみえたさい、上級組織の威光を借りて、劉志丹派に「右傾」のレッテルを貼り、高崗の更迭を行った一種の奪権会議である。新版第2巻の内容は、それに対応する旧版が発表されていないため、具体的にどう変化したのかを論ずることはできないが、第1巻同様に、清廉・篤実な劉志丹とその同志に対して、陰険・不誠実な謝子長とその一味という図式が第2巻でも貫かれている。

久々に再会した「方自強」に対して、劉志丹は過去の不愉快ないきさつ（三甲塬事件）を一旦は洗い流して暖かく迎えるのだが、「方自強」やかれと一緒にやってきた「申超人」（郭洪濤の化身）は、たちまち本性をむき出す。方と申は、劉志丹らとの連席会議で、中央からの指示（劉志丹らを右傾日和見主義と批判するもの）を読み上げ、団結を期待していた「人々の満腔の熱望に頭から冷や水を浴びせかけた」のだった。劉志丹の同志たちは、方らにたいして、「再会したばかりゆえ、いきなり感情を損なうのはまずいと考え、できるだけ気持ちを抑えた」ものの、同志からいわれのない誹謗を受けては「黙っているわけにはいかなかった」。劉志丹も反論に立ち、こう述べる。

〔非難のレッテルは〕いささか幼稚でバカげているが、申超人同志を責めるわけにはいくまい。第一に、かれは上から言われたことをオウム返しにそのまま言っているだけだし、第二にかれはこの実情をわかっていないのだ。これまでの経緯は非常に長く、問題は入り組んでいて、一言では説明できない。かれがこの山地で何年か暮らせ

ば、きっと脳みそも一新されることだろう。一方、自強〔方自強〕同志は実情をわかっているのだから、このような指示を受け入れるべきではなく、中央なり北方代表なりにハッキリと申し上げるべきだろう。(294-295頁)

これに対して申超人は、党中央の路線を擁護するかどうかは原則問題だと激昂、「陝甘辺と紅26軍が実行しているのが、中央の路線ではないことは明らかだ」と反論し、方自強もまた「これは上級組織の指示であり、わたし個人のものではない」と突っぱねるのだった。劉志丹の同志たちは、次々に異議を唱えたが、それも相手にされず、結局「右傾日和見主義」の責任をとる形で26軍42師の政治委員だった「李克夫」(高崗)が解任されてしまう。かくて会議は気まずい雰囲気のまま終わり、方自強と申超人は帰っていったのだった。

先の三甲塬事件に続き、「閻家窪子会議」(小説では「楊家峯での会議」)でも繰り返された方自強のこの仕打ちは、当然のように、劉志丹の同志たちには強い不信感を残した。これに関連して、小説の中で劉の部下の一人「楊偉林」(蔡子偉<sup>139</sup>)を仮託した登場人物は、「〔方〕自強って言う男は、まるで“白衣秀士”王倫で、人をまとめることなんてできない。奴才を使うのがせいぜいで、人才を使うことができないから、大事なんで成し遂げられっこない」と告白している(第2巻、308頁)。“白衣秀士”王倫とは、『水滸伝』に出てくる梁山泊の元寨主(書生あがり)で、度量の小さい盗賊の喩えである<sup>140</sup>。つまり、謝子長は劉志丹とは比べものにならない小物で、その下に集まってくる連中(閻紅彦、郭洪濤ら)は『水滸伝』で言えば、せいぜい杜遷、宋万、朱貴クラスの「奴才」に過ぎないということが暗示されているわけである。

新版第2巻はこのように、劉を高め、謝を譏ることににおいては、第1巻と同じ志向性を保っているが、こうした党内の「路線問題」だけでなく、劉志丹を取りまく同志たちの恋愛を積極的に描いているというもう一つの特徴を持っている。これは、旧版においては、ほとんどなかったことである。人間らしい愛を持った人物として描かれているのは、劉志丹の部下にして従弟の「王兆平」(劉景範)と、元民団の首領ながら劉の名望を慕って帰順してきた郭保権(モデルは郭宝珊)である<sup>141</sup>。「王兆平」の恋愛をとりあげた第14章から第17章に登場する女性党員の「馮蕙瓊」は、知識人幹部「李克夫」の求愛を退け、自ら「王兆平」に愛を打ち明ける積極的な女性である。「王兆平」は彼女の愛に感激してそれを受け入れるが、この段階では厳しい環境で子をなすことを恐れ、結婚はしない。ただし、第3巻では共に肅清の嵐をくぐり抜けた二人が、運命的な再会を果たし、結ばれることになっている。小説の設定では、「馮蕙瓊」は「王兆平」よりも2歳年上ということになってい

るが、「王兆平」が劉景範の化身であることを考えるならば、「馮蕙瓊」は作者李建彤が自らを投影したものではないかと推測することができよう。李建彤が実際に劉景範と知り合うようになったのは、1940年代半ばであり（結婚は1946年）、小説の舞台となった時期の陝北には彼女はいない。だが、小説『劉志丹』事件の発生とそれに続く隔離審査、文革の苦難の中で離ればなれになった李と劉が、その後に劇的な再会を果たしたこと<sup>(142)</sup>を考えるならば、1935年秋の肅清の嵐の中で、愛し合いながらも離ればなれにさせられた「馮蕙瓊」と「王兆平」が奇跡的な再会をする筋立ては、どう見ても作者とその夫劉景範の物語にオーバーラップするのである。

これに対して、劉志丹の敵方にあたる「方自強」とその仲間にも、周辺の女性をめぐる描写があるが、それは半ば打算的な、享樂的な愛である。戦闘で重傷を負い、床に伏す「方自強」を劉志丹が見舞うシーン（第2巻、376-378頁）では、方を看護する人物が方の妻について、「幼すぎるんです。〔方〕自強は今38歳なのに、彼女はたったの17、8歳、さして教養もなくて遊び呆けているばかり。誰かが誘いに来ると、すぐに出て行ってしまうのです」と語っている。方を看病するべき若き妻がかたわらにいないのは、そのせいだった。そして、病床の方は劉志丹の気遣いに、「あの女房のことにはかまわないでくれ。あいつが誰かと一緒になりたいのなら、好きにさせるまでさ」と吐き捨てるのだった。この箇所では、さらに方自強の不幸な私生活の経緯が説明されている。

1929年に自強が療養のために陝北に行った際、霍力堅がかれに小学校教員の左香雲という女性を紹介した。二人は何年か付き合い、北平で結婚した。一年ほど一緒に暮らしたが、子どもはできなかった。自強には陳宏という名の友人がいたが、かれが二人の間に潜り込んできてしまった。自強が〔北平を〕離れるころには、香雲は陳宏と同居していた。つまり、〔左香雲は〕こっち〔方自強〕とは離婚もしていないのに、向こうでは陳宏の子どもを生んでしまったのだった。自強は陝北にもどるとまた別の、つまりこの小娘と一緒にになったのだが、それはその娘の母親が差し出してきたのだった。〔恋愛〕感情などあろうはずもない。

ここで語られている謝子長の不幸な私生活は事実であったため、登場する女性たちや「陳宏」を比定することは容易である。いったん方と結婚しながら、別の男になびいてしまった「左香雲」とは、女性党员・尤祥齋（1912-2006）であり、彼女を寝取る形になった「陳宏」とは、謝子長の股肱だった閻紅彦にほかならない。そして、謝子長の看病もせず遊び歩く小娘（王秀英）とは、謝の死後に郭洪濤に嫁することになる史秀雲（1917-1948）

である。つまり、謝子長と閻紅彦、郭洪濤とは、単に同郷の誼があっただけでなく、女性を間に挟んだ深い関係があったのだった。謝子長、閻紅彦、郭洪濤と複雑な関係を持ったこの二人の女性は、第3巻に描かれる肅清の中で、喜々として肅清を行う側に回ることになる<sup>(143)</sup>。

一方、まともな看病してもらえないまま、死の時を迎えようとする「方自強」は、見舞いに来てくれた劉志丹の隔意のない態度に感激し、今までの数々の誣告や奪権陰謀を、泣きながら詫びるのであった。

### 5 新版『劉志丹』第3巻における路線闘争と同志殺し

新版第3巻が描く1935年秋の肅清は、三巻本のクライマックスともいうべき部分である。この巻では、謝子長こと「方自強」はすでに死んでおり、その後継者ともいうべき「申超人」(郭洪濤)が憎むべき敵役として全編にわたって登場する。「方自強」の死によって、地方党の大権を一手に握ることになった「申超人」は、1935年夏に北方局から派遣されてきた「曾光」(モデルは朱理治)や董洪海(同聶洪鈞)、さらには紅25軍を率いて陝北の根拠地にやってきた余勝(同徐海東)、岳威(同戴季英)、賀仲(同程子華)らに対して、劉志丹らに関するあらゆる讒言を触れ回り、かれらと共に劉志丹らの肅清に乗り出すのである。

「肅清」を描くこの巻の最大の特徴は、肅清運動で逮捕された被疑者一人一人の訊問過程を延々と書き連ねている点にある。分量でいえば、600頁ほどのこの巻のうち、その四分の一が訊問の場面にあてられているのである。これは、小説としては、極めて異例な構成であり、それゆえに文学作品の見地から見た場合には、この書の魅力が大きく減じる一因ともなっている。小説が第3巻に至って、このようなややいびつな構成になったのは、作者のふたつの意図が反映されていたからだと言及することができる。

ひとつは、作者李建彤が『劉志丹』事件にかかわる審査・査問やその後の文革で味わわれた拷問の取り調べの連続を、場面を1935年秋に移して疑似的に再現するねらいである。このねらいは、李が晩年に執筆した『反党小説《劉志丹》案実録』の内容の過半が、文革中の訊問審査の回想や再現(自分が何を聞かれ、何をしゃべったか)であることによって裏付けられよう。果たして李は、回想の中で、彼女を隔離審査した側が持ち出した「罪状」の字句や自白を強要しようとするかれらの攻撃的口調は、「1935年に王明路線が陝北でやった肅清の口調そのものであった。劉志丹らはそのおかげで獄に繋がれたわけだが、今やその古い芝居がまたも同じ調子で再演されたのであった」と述べている<sup>(144)</sup>。彼女にとっては、自らが『劉志丹』事件ゆえに受けた迫害の構図は、1935年に劉志丹らが受け

た迫害と同根のものだったのである。

そして、もうひとつのねらいは、被疑者一人一人の供述を借りて、陝北・陝甘辺革命根拠地の歩みを振り返り、肅清以前から存在した党内抗争や路線闘争の真相や背景を改めて説明しようとするのである。実は、これも第一のねらいと部分的に重なり合うものである。つまり、李建彤は、訊問人も訊問内容も様々な審査を延々と受ける過程で、訊問内容の背景にある様々な人々の思惑や一部の西北歴史問題当事者たちの二面性（彼女が支援者だと見ていた人が、実は彼女を誣告する側に回っていたなどのこと）をようやく知ることがしばしばあったのである。この体験が、1935年の肅清の陰にあったそれまでの旧怨の由来を肅清被害者の口から語らせるという手法につながったのではないかと考えられる<sup>(145)</sup>。

小説の中で、逮捕された劉志丹の同志たちから語られる誣告の遠因・真相は、まとめれば次のようなものだった。すなわち、かねてから劉志丹を快く思っていなかった「方自強」は、時に陝北の現地劉志丹部隊の乗っ取りを企んだだけでなく、1933年ごろに北平で活動したさい、「陳宏」「申超人」らの連中とつるみ、中共北方局に劉志丹を誣告する陰謀をめぐらして、劉に「右傾日和見主義」のレッテルを貼った。「方自強」らの密告に接した北方局は、当時の極左的傾向も手伝ってそれを真に受け、まず方、申を、次いで曾光らを陝西に派遣して劉志丹らの処分へ乗り出した。方の死後、陝北の指導者を自認するにいたった申超人は、曾光だけでなく、その後に陝北にやってきた紅25軍の指導者にも同様の誣告内容を伝え、曾や25軍を肅清運動に駆り立てた、と。

誤った肅清運動の根本的責任は、曾光ら肅清執行者よりも、むしろ曾らに誤った情報を意図的に流した方自強、申超人、陳宏の側にあるというこの認識は、肅清運動ののち釈放された劉志丹の口からも、「あれ〔レッテル〕はかれ〔申超人〕が北平で陳宏とこっそり言っていたのだ。当時、申超人と陳宏、それに方さん〔方自強〕は一緒に住んでいた。デマはみんなそこから出てきて、それが肅清のお触れになったのさ」と語られている（第3巻、581-582頁、同様の内容は483-484頁にも見える）。このほか、肅清の責任はどこにあると思うかと尋ねる中共の幹部（宋政委——宋任窮）にたいしても、小説の劉志丹は「それはハッキリしています。ほかの人はみな騙されたのであって、主要な役割を果たしたのは申超人です」と即答している（第3巻、567頁）。

これに対して、肅清の執行責任者であった岳威（戴季英）、曾光（朱理治）への劉志丹の釈放後の態度は、驚くほど寛大である。直に謝罪した岳威にたいして、劉は「あなたは執行者に過ぎない。……肅清の後半には、あなた方は目が覚めたわけで、それは容易なことではありませんよ」と慰め、岳威を感涙させている（491頁）。また、周恩来に曾光の今後の処遇について意見を求められたさいにも、劉は「かれは認識の上では間違っていま

したが、隠れて悪いことはしていません。……それに、肅清の過程でかれは次第に変わっていきました」と述べて、曾光をかれの才能を生かせる東北軍での仕事に配置するよう具申している（487-488頁）。劉志丹のこれらのセリフは、いずれも李建彤の認識をそのまま反映しているものだと考えてよいだろう<sup>(146)</sup>。

一方、郭洪濤こと「申超人」と閻紅彦こと「陳宏」については——これまた李の認識を反映する形で——肅清は正後もおのれの誤りを認めず、劉志丹への中傷をやめない悪辣な人物として描かれている。すなわち、「申超人」は、中共中央の指導者がまだ現地の実情を飲み込めないのを良いことに、自分は劉志丹が右派だとは言っていないと弁明する一方、陰に陽に劉志丹グループを排斥し続けるのである。さらには、劉志丹が戦死したと知らされると、「申超人」は「方自強」の死後に自分の愛人にした「王秀英」や仲間の「戴鴻遠」と早速酒宴を開いて、快哉を叫ぶのだった（598頁）。

かたや「陳宏」は、小説第3巻では、派遣されていたソ連から肅清事件後に帰国し、「申超人」の推挽により紅軍の軍長に任命されている（483-484頁）。「陳宏」は肅清そのものには関わっていないし、ソ連で軍事を学んで帰国したからというのが、その理由だった。「陳宏」こと閻紅彦は、史実においても、確かに1935年暮れにソ連から帰国し、翌年2月に紅30軍の軍長に任命され、劉志丹の28軍とともに「抗日東征」作戦に参加している。劉志丹は、周知のようにこの作戦のさなかに戦死するのだが、劉は小説の中で、戦死直前に部下に対してある不吉なことを語っている。劉のかつての部下で、肅清でも迫害を受けた「楊冲」（モデルは楊森）は、釈放されたあと、「陳宏」の紅30軍の参謀長に任命されるのだが、それを聞いた劉志丹は楊の随員に、次のように語るのである。

君には、楊冲の状況について注意してほしい。かれのところは周りが良くない。これは古来、戦場ではよく起こることだが、敵味方の作戦の中で、味方の中にいる政敵を始末しようとする者がいるものだ。……楊冲の身の安全を絶対に守ってもらいたい。我々は戦場で死ぬことを恐れるものではないが、誰かが後ろから鉄砲を撃ってきたり、黄河渡河のさいに奸計をめぐらしたりするのが心配だ。……もし、陳宏が命令を守らずに軍をこっそり引き上げて、楊冲を置き去りにでもしたら、敵の追撃を受ける楊冲は孤軍で戦うことになる。……敵の手を借りて味方を殺すことは、古今東西、例にことかかない。……実は、陳宏はかつて密かに人を殺したことがあるのだ。（581-582頁）

つまり、同じ部隊に配属されたのをこれ幸いと、軍長の「陳宏」が戦闘のどさくさに紛れて、「楊冲」を謀殺するのではないかと恐れているのである。小説では、「楊冲」のその

後については書かれていないが、我々は「楊冲」のモデルである楊森が、東征軍の主力を陝西に帰還させるために、黄河渡河点を守る殿軍となって戦死したことを知っている<sup>(147)</sup>。劉志丹戦死の一カ月後のことで、場所も劉と同じく三交鎮であった。楊森戦死の具体的状況を伝える資料は残っていないが、小説での劉志丹の予言が何らかの事実を反映したものであるならば、かれの予言は、楊森の最期が閻紅彦の謀殺によるものだという李建彤の考えを反映したものにはかならない。李はもちろん楊の最期を直接に知り得る立場にはなかったから、それは彼女が関係者への取材を通して聞知、確信したものなのかも知れない。

中共の幹部が戦場の混乱に乗じて、怨みのある同志を死地に追いやることを暗示するこのくだりは、小説の中でももっとも衝撃的な部分である。付言すれば、実は劉志丹の死についても、「政治謀殺」説があることを指摘しておかなければなるまい。一部にささやかれている謀殺説とは、中共中央の一部指導者が陝北の英雄を除くためにそうした挙に出たのだとするもの<sup>(148)</sup>で、専門家からは荒唐無稽も甚だしいと一笑に付されることが多い<sup>(149)</sup>が、陝北では現在でもこの説を信じる者が少なくない。筆者は、劉志丹や楊森らの死が「戦死」なのか、あるいは戦死という名の「謀殺」なのか、それを確実に証明する資料を持たないが、「謀殺」説の背後に、小説『劉志丹』の描いた西北革命根拠地での同志間の根深い対立が横たわっているということは、確実に言えるであろう。

小説『劉志丹』が暗示する同志殺しの底知れぬ闇と、作者・李建彤をしてそれを敢えて小説で暗示せしめた郭洪濤、閻紅彦への敵意は、この第3巻に至って、この小説を文学の範疇を越えるものに変えたという感がある。とりわけ、「西北歴史問題」の史実を踏まえてこの小説を読むとき、史実と虚構とが完全に一体となったこの小説に、読者は慄然とさせられるのである。

## おわりに——小説『劉志丹』再度の扼殺

小説『劉志丹』の新版は、1983年の関係者の座談会とそれを受けた中共中央の正式通達によってようやく沈静化した「西北歴史論争問題」に大きな波紋を引き起こした。本稿第四章で解説したように、この問題のいきさつに詳しい者が読めば、新版『劉志丹』の仮名の登場人物はほぼ推定され、小説としての虚構性はないに等しいからである。とりわけ、その悪事を暴露された謝子長・閻紅彦の遺族や関係者、さらにこの時まだ存命だった郭洪濤から、強い反発が寄せられたであろうことは想像に難くない。

かくて、新版の全巻が刊行された翌年、すなわち1986年1月3日に中共の指示に基づいて、小説『劉志丹』についての座談会が開催されるに至った。西北歴史問題の関係者を集

めた座談会は、それまでも幾度となく開かれてきたが、それがまたも繰り返されたのである。座談会の司会は馮文彬（当時、中共中央党史資料徵集委员会主任）だったが、實質上はこの座談会にも参加した習仲勳（中央政治局委員、中央書記處書記）が問題の処理をまかされていた。会には、王首道、榮高棠、何載、馬文瑞、宋時輪、張秀山らが参加したが、作者の李建彤は招かれなかった<sup>(150)</sup>。会での議論の模様を伝える記録などは公表されていないが、結論としては、この小説が1983年の中共中央の通達<sup>(151)</sup>などに違背する不適当なものであることが指摘された模様である。これを受けて1月5日、習仲勳の指示を受けた馮文彬が、座談会の結果を中共中央総書記の胡耀邦に報告、かくて小説の発行停止が命じられたのであった。同書が、深く人々の尊敬を集め、すでに亡くなっている指導者同志——劉志丹、謝子長——に対してほしいままに褒貶し、貶められた者にかんする一部の描写も党の原則に違背しているというのが、その処分の理由であった<sup>(152)</sup>。

この処分を聞かされた李建彤と陝北の老幹部の一部はそれを不服として、習仲勳に訴えたが、党内の融和を最優先させた習は、その動きを抑えたという<sup>(153)</sup>。かくて、総書記の胡耀邦がこの座談会の報告にたいして、1月12日にそれを是認する批示を与えることで、全ては幕引きとなった。新版『劉志丹』発行停止処分に関して、唯一公表されたこの批示の全文は、次の通りである。

作家が党史を題材とする文学作品を創作することに対して、党は作家が風格や芸術の面で自由に選択することを認め、干渉を行ってはならない。ただし、この種の作品において、特に文学伝記作品（小説、戯曲、映画、テレビ番組を含む）においては、党史の重大な史実をねじ曲げてはならず、とりわけ党の歴史人物にかんする描写に歪曲があってはならない。なぜなら、それらは芸術領域の是非の問題などではなく、政治領域の是非の問題だからであり、作家の社会的責任という職業道徳の問題でもあるからである。これは、党員作家が必ず模範的に遵守し、いい加減にしてはならないことである。<sup>(154)</sup>

注意しなければならないのは、『劉志丹』の処分をめぐって出されたこの批示が、党史を題材とする芸術創作全般にたいする規定となっていることである。『劉志丹』の後にも、党史を題材としたいくつかの伝奇、ルポルタージュが批判を浴びているが、それらの批判の多くは、この批示を根拠にしてなされている<sup>(155)</sup>。ついで注意すべきは、これが法律はおろか、「通達」や「指示」でもなく、党総書記の「批示」の形で「党員作家」全体への命令となっている点である。党員でない作家はどうか、党史の範囲はどこまでなのか、



また「重大な史実のねじ曲げ」や「歪曲」の基準はどうか、この文書はその命令が及ぶ範囲や裁定の基準については、はなはだ曖昧である。この批示はそれ以後、取り消された形跡はないから、今でも中国の芸術創作にかんする一般的規定となっているはずである。芸術創作といわゆる名誉権の保護とのせめぎ合いは、国の体制に関わらず、一般的な問題だが、その問題が中国では、この批示によって処理されているということは、我々中国の現代文化を考察する者がおぼえておかねばならないことであろう。そして、それが『劉志丹』という複雑な経緯と背景を持って書かれた本をめぐって下された方針であるということも。

先に、いわゆる「西北歴史論争問題」に関連して下された中共中央の文件（中共中央1983年第28号文件）が、西北地域の革命史だけでなく、中共党史の著述全般にかんする準則となっていることを指摘したが、つまり、小説『劉志丹』とその背景である「西北歴史論争問題」にかんして下された中共中央の指示は、ひとつは文芸全般を規定する準則として、もうひとつは党史全般を規定する準則として、共に一作品、一地域を越える大きな影響を今日に及ぼし続けているのである。小説『劉志丹』のはらんでいた問題は、実に大きかったと言わざるを得ない。

かくて、『劉志丹』の新版は、奇しくもかつてその小説事件に連座して冤罪を被った習仲勳と、これまたかつて1979年にその名誉回復を行った胡耀邦という二人の指導者によって、改めてこの世から葬り去られたのであった。李建彤はその遺著の中で、この二度目の扼殺について、次のように述べるだけで多くを語ることはなかった。

小説『劉志丹』三巻本は、正式に出版されると、またも当時のかの日和見主義者たちの包圍攻撃と誣告にさらされた。かれらは依然として高い地位にあり、グルになって上下に気脈を通じたのである。中央の一部の指導者たちは妥協して、またもわたしの小説を押さえつけてしまった。<sup>(156)</sup>

読みようによっては、真実の発掘と暴露との境界線にある小説とも言える新版『劉志丹』を、今日いかに評価すべきなのか。新版の発行停止について触れる中国の文学研究は、おしなべて胡耀邦の批示を踏襲し、この小説の発禁は「史実をかえりみず、意図的に〔特定の人物を〕持ち上げ、〔事実を〕改竄したことのむくい」であったとして、著者に厳粛な態度が欠けていたことを批判する傾向がある<sup>(157)</sup>。むろん、これに対しては、小説、文学にたいする政治の不当な介入を指弾する評価もありえよう。共産党の中国においては、芸術や文化は今も政治のしもべであり、自由な表現や創作はゆるされるはずもないのだ、小

説『劉志丹』の再度の発行停止は、その何よりの証左だ、と。

だが、この小説を発禁にされた李建彤が問題にしているのは、厳密に言えば、文学がまたも政治に圧殺されたという両者の間の支配・隷属の構造的なことではない。彼女が反発しているのは、まず何よりも、彼女の掲げる「真実の記録」になおも異を唱える敵対グループの行為であり、次いで正しい裁定をしてくれない党のありようなのである。彼女にしてみれば、純粹の文学や歴史が政治に迫害されたことに憤っているのではなく、それ自身が正義を訴え、実現すべき手段であるところの文学や歴史の主張が通らなかつたことに憤っているのである。その意味では、彼女にとっても、文学は正義を実現するための政治と同義のものであったと言わざるを得ない。「小説」とはいうものの、書かれていることはすべて「真実」だとあくまでも訴えたその言葉が、彼女にとっての「小説」と「真実」の軽重の差を、はからずも示しているといえるだろう<sup>(158)</sup>。文学・歴史の政治との不可分性は、それぞれ毛沢東の文芸講話（1942年）や歴史決議（1945年）以来、現代中国においては、何度も繰り返して叫ばれてきたものであるが、それはどうやら、延安で自己形成をした彼女が無意識のまま終生抱き続けた観念でもあったように思われる。

小説『劉志丹』については、その三巻本が容易には見られないという状況があるため、今後も小説そのものの分析が進むことは期待できそうにない。今日、この小説が何らかの意味を持つとすれば、それはこれを史料として読むという小説本来の価値からは離れた方法をとるか、あるいは本稿が行ったように、この小説を史的背景、政治的背景と共に分析し、文学・歴史と政治とが一体となっている社会主義文化の構造を如実に示す一典型としてとらえるか、のいずれかであろう。それは、著者の李建彤を含め、小説『劉志丹』事件に連座した万余の関係者がそうした読み方を望むかどうかとは、別次元のものでなければなるまい。

**【補記】** 本稿脱稿後の2009年11月に、江西教育出版社から三巻本『劉志丹』（李建彤著）が再刊された。ただし、刊行にあたっての説明や前言などは一切つけられておらず、したがって発行停止処分を受けた同書が、なぜ再刊可能になったのかはわからない。また、同書のカバーには「首次大量公开发售」の宣伝文句がつけられているが、1984-85年に出版された文化芸術出版社版は、直後に発行停止にこそなったが、当初は4万部以上も印刷されているのである。こうしたことからうかがわれるのは、今回の再刊本が1986年の発行停止処分の事実をできるだけ伏せようとする姿勢を持っているということである。

内容について言うならば、再刊本は大枠で文化芸術出版社版の三巻本とほぼ同じで、本稿第IV章で具体的に指摘した衝撃的な内容の部分もそのままである。ただし、登場人物の

設定とストーリーには、若干の変更が加えられている。すなわち、ヒロインである馮蕙瓊が、前半部と後半部で二人（馮蕙瓊と何婕舒）の登場人物に分けられ、文化芸術出版社版では暗示されていた馮蕙瓊と劉志丹の密やかな感情の交錯に関する部分がすべて削除されているのである。また、文化芸術出版社版では、馮蕙瓊は1935年の肅清で九死に一生を得て王兆平と劇的な再会を果たすが、江西教育出版社版では、何婕舒は肅清で命を落とす結末になっている。

こうした人物設定やストーリーの変更は、李建彤の生前の考えを反映したものなのであるが、そうした諸々の事情について、この再刊本が全く説明を欠いているのは残念というほかない。江西教育出版社の再刊本が、当代人気作家・芸術家たる劉索拉の母が書いた問題作の復刊という触れ込みで、今後なにがしかの話題を呼ぶことになれば、再刊本出版の背景が明らかになる可能性もあるが、それはそれでこの問題小説の歴史にさらなる物語をつけ加えることになるだろう。その意味では、小説『劉志丹』をめぐる問題は、今なお進行中なのである。

## 註

- (1) 温相『高層恩怨與習仲勳——從西北到北京』香港、明鏡出版社、2008年、511頁。
- (2) 「毛沢東の中共8期10中全会での講話（1962年9月24日）」（中共中央文献研究室編『毛沢東伝（1949-1976）』中央文献出版社、2003年、1254-1255頁；『建国以来毛沢東文稿』第10冊、中央文献出版社、1996年、194頁）。
- (3) 日本での早い時期の研究としては、阪口直樹「李建彤の『劉志丹』をめぐる——1962年中国当代文学の一状況」（『啞』21/22合併号、1985年、のち阪口『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』東方書店、2004年 収録）がある。近年のものとしては、David Holm, *The Strange Case of Liu Zhidan, The Australian Journal of Chinese Affairs*, No. 27, 1992. や魏新生「小説《劉志丹》案述評」（『懷念習仲勳』中共党史出版社・中国文史出版社、2005年）、詹玲「論《劉志丹》——一部命運坎坷の小説」（『文学評論』2007年第1期）がある。
- (4) 李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』香港、星克爾出版、2007年。なお、同書の出版は2007年であるが、原稿自体は1988年に脱稿している（同書241頁）。
- (5) Edger Snow, *Red Star over China, First Revised and Enlarged Edition*, New York: Grove Press, 1968, p. 209. (邦訳:松岡洋子訳『中国の赤い星』上巻、筑摩書房〔ちくま学芸文庫〕、1995年、287頁)。
- (6) 李建彤の経歴については、劉米拉等「懷念母親李建彤」『協商論壇』2006年第6期参照。
- (7) 李建彤『劉志丹』上巻、工人出版社、1979年、前言1頁。本節で述べる『劉志丹』執筆の経緯は、特に断らない限り、同書の前言による。
- (8) 早い時期の研究としては、徳田教之『毛沢東主義の政治力学』（慶応通信、1977年）の第8章「高崗・饒漱石肅清の政治力学」があり、近年では中国でも、馬畏安『高崗、饒漱石事件始末』（当代中国出版社、2006年）というルポルタージュが出版されている。このほか、

- 香港では、趙家梁、張曉霽『半截墓碑下的往事——高崗在北京』（大風出版社、2008年）、史鑒編『高崗「反党」真相』（香港文化芸術出版社、2008年）、陳大蒙、劉史『落井下石——重查高崗案』（明鏡出版社、2008年第一版、2009年第二版）が出版され、事件について検討を加えている。
- (9) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』19頁。
- (10) 工人出版社の編集者として『劉志丹』執筆をサポートした何家棟のインタビュー記録が「従吳運鐸到《劉志丹》——何家棟訪談」として、邢小群『往事回聲——中国著名知識份子訪談録』（香港、時代国際出版、2005年）に収められている。
- (11) 周揚は文芸書の審査・検閲にあたる中央宣伝部の責任者であると同時に、李建彤の魯芸時代の恩師でもあった。周知のように、周揚は文革時期に批判され、失脚することになるが、その際の「罪状」のひとつが小説『劉志丹』の陰謀に加担したというものであった。姚文元「評反革命两面派周揚」『人民日報』1967年1月3日参照。
- (12) 習仲勳「永遠難忘的懷念」（『人民日報』1979年4月8日、『習仲勳文選』中央文献出版社、1995年、315頁）；習乾平「薄一波談“炬火純青”与“劉志丹小説冤案”内幕」『懷念習仲勳』中共党史出版社・中国文史出版社、2005年；范民新「16年的苦難歷程」（『習仲勳革命生涯』中共党史出版社・中国文史出版社、2002年）。
- (13) 掲載時期は以下の通り。『工人日報』7月28, 29, 31日、8月2, 3, 4日、『光明日報』8月2, 7日、『中国青年』1962年第15/16期（合刊）、8月。
- (14) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』50-51頁、李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』雲南人民出版社、2003年、173頁。
- (15) 閻紅彦「回憶陝甘高原早期的革命武装闘争」（『星火燎原』第2集、人民文学出版社、1962年）は、自身の考えに基づき、劉志丹よりも謝子長を陝北革命の指導者として描くものであった。
- (16) 前掲魏新生「小説《劉志丹》案述評」、前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』174-175頁、叢進『曲折發展的歲月』人民出版社、2009年、381-382頁。
- (17) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』51頁。
- (18) 薄一波『若干重大決策与事件的回顧』中共中央党校出版社、1993年、1095-1097頁。なお、同書修訂版（人民出版社、1997年）では、『劉志丹』批判についての閻紅彦、康生らの具体的介入についての部分が削除されている。
- (19) 「關於右傾機會主義分子問題的批語（1959年8月10日）」『建国以来毛沢東文稿』第8冊、中央文献出版社、1993年、431頁。
- (20) いわゆる「七千人大会」については、張素華『変局——七千人大会始末』（中国青年出版社、2006年）が詳しい。
- (21) 王焰主編『彭德懷年譜』人民出版社、1998年、771-775頁、前掲叢進『曲折發展的歲月』367-371頁。彭德懷のいわゆる「八万言書」は、今日にいたるまで全文は公表されていない。
- (22) 前掲薄一波『若干重大決策与事件的回顧』1993年版、1090-1093頁。
- (23) 同前1096頁。
- (24) 同前1095頁、前掲叢進『曲折發展的歲月』382頁、前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』179頁、前掲魏新生「小説《劉志丹》案述評」。
- (25) 前掲薄一波『若干重大決策与事件的回顧』1993年版、1096頁、林青山『康生外伝』中国青年出版社、1988年、195頁。

- (26) 前掲薄一波『若干重大決策与事件的回顧』1993年版、1096頁。
- (27) 「康生の中央專案審查小組工作會議での発言（1967年9月）」前掲温相『高層恩怨與習仲勳——從西北到北京』499-500頁。
- (28) 前掲魏新生「小説《劉志丹》案述評」。
- (29) 「中共8期10中全会における毛沢東の講話（1962年9月24日午前）」宋永毅主編『中国文化大革命文庫』CD版、香港中文大学中国研究服務中心、2002年。
- (30) 康生は8月24日に楊尚昆にたいして、書記處が小説の問題を取りあげるよう求めた際、自身はその小説の中身を読んではないということを告げていたという（前掲叢進『曲折發展的歲月』382頁）。
- (31) 林牧「我親歷的批習鬭爭」史鑒編『高崗「反党」真相』香港文化芸術出版社、2008年。なお、林によれば、8期10中全会での習仲勳批判の大合唱の中で、それにくみしなかったのは、趙伯平（当時、陝西省長）ただ一人であったという。
- (32) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』53-57、131頁。閻紅彦の回想については、注15参照。
- (33) 前掲魏新生「小説《劉志丹》案述評」。
- (34) 李建彤『劉志丹』上巻、工人出版社、1979年、前言6-10頁。
- (35) 文革中に李建彤が受けた迫害や尋問にまつわるエピソード、関係者の苦勞などは、前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』が非常に詳細に述べている。
- (36) 『建国以来毛沢東文稿』第13冊、中央文献出版社、1998年、412頁。
- (37) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』223-225頁。
- (38) 馬文瑞「紀念閻紅彦同志」『中共党史研究』2000年第1期。
- (39) 「中共中央批轉中共中央組織部關於為小説《劉志丹》平反的報告（1979年8月4日）」中共中央組織部幹審局編『幹審工作政策文件選編』上、党建讀物出版社、1993年。
- (40) 「中共組織部轉發中共陝西省委《關於為所謂“彭、高、習反党集团”問題徹底平反的請示報告》的通知（1980年1月11日）」、「中共中央關於為所謂“習仲勳反党集团”平反的通知（1980年2月25日）」（いずれも、前掲中共中央組織部幹審局編『幹審工作政策文件選編』上、所収）。
- (41) 畢興等「閻紅彦」『中共党史人物伝』第28巻、陝西人民出版社、1986年。
- (42) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』50、97頁。
- (43) 劉志丹をめぐる陝北の革命運動については、菊池一隆氏が1980年代前半に発表した「陝西省における青年運動——陝北、陝甘辺ソヴェトの創始者劉志丹とその周辺」（『歴史における民衆と文化——酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』国書刊行会、1982年）、「劉志丹と陝北革命」（『中国近現代史の諸問題——田中正美先生退官記念論集』国書刊行会、1984年）、および Mark Selden, *China in Revolution: the Yanan Way revised*, Armonk, NY: M. E. Sharpe, 1995（邦訳：小林弘二、加々美光行訳『延安革命』〔原書1970年版からの翻訳〕筑摩書房、1976年）が早い時期の優れた成果である。ただし、いわゆる劉志丹問題の核心をなす党内鬭争については、資料的制約もあって詳しい言及はなされていない。一方、中国では、中共陝西省委党史研究室編『劉志丹』（陝西人民出版社、1993年）、劉志丹紀念文集編委會編『劉志丹紀念文集』（軍事科学出版社、2003年）、中共陝西省委党史研究室等編『建国以来劉志丹研究文集』（陝西人民出版社、2008年）などがあるが、劉志丹が被った迫害の由来や経緯については、詳しく触れないのが通例である。
- (44) 陝北革命と秘密結社・会党との関わりについては、注43であげた研究のほかに、孫江『近

- 代中国の革命と秘密結社——中国革命の社会史的研究（1895-1955）』（汲古書院、2007年）の第8章が詳しい分析をしている。
- (45) 李振民等「謝子長」『中共党史人物伝』第3巻、陝西人民出版社、1981年。謝子長の事績については、張鋒『民族英雄謝子長』（中国文史出版社、2005年）、中共陝西省委党史研究室等編『謝子長紀念文集』（陝西人民出版社、2005年）など参照。
- (46) 代表的なものとして、吳志淵『西北根拠地的歴史地位』（湖南出版社、1991年）、張宏志『西北革命根拠地史』（陝西人民出版社、2000年）、任学嶺・康小懷「対劉志丹、謝子長早期軍事活動の歴史考察和再認識」（『延安大学学报』2008年第4期）、李建国『陝甘寧革命根拠地史』（甘肅人民出版社、2009年）などがある。
- (47) 本稿の「三甲塬事件」に関する記述は、特に断らない限り、主に劉景範「“三家原事件”の真相（1982年7月10日）」（前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』所収）による。
- (48) 『黄土高天拳紅旗——吳岱峰回憶録』私家版、1999年、77-86頁。なお、謝子長と劉志丹の不和の要因は、このほかにも種々あったが、あまりにも細かい事柄に属するため、ここでは取りあげない。
- (49) 特に断らない限り、陝北特委、陝北遊撃隊に関する記述は、前掲張宏志『西北革命根拠地史』174-183、196-206頁、前掲李建国『陝甘寧革命根拠地史』48-53頁による。
- (50) 『郭洪濤回憶録』中共党史出版社、2004年、25-26頁。なお、閻紅彦は1933年暮れまで上海、北平、張家口などで謝子長と行動を共にしたが、組織の命で1934年7月にコミンテルン大会への出席者としてソ連に派遣された（1935年暮れに帰国）ため、謝と共に陝北にはもどらなかった。
- (51) 張秀山『我的八十五年——從西北到東北』中共党史出版社、2007年、73-74頁、前掲『郭洪濤回憶録』45-47頁。なお、中共北方局と陝北特委、陝甘辺特委の間の指示、報告を収めた公刊の資料集としては、中共陝西省委党史研究室等編『陝北革命根拠地』（中共党史出版社、1995年）、中共陝西省委党史研究室等編『陝甘辺革命根拠地』（中共党史出版社、1997年）、中共陝西省委党史研究室編『西北革命根拠地』（中共党史出版社、1998年）、『中共中央北方局（土地革命戦争時期卷）』（上下、中共党史出版社、2000年）などがあるが、この2通の指示書簡はいずれにも収録されていない。
- (52) 前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』74-75頁、張策『我的歷史回顧』改革出版社、1997年、49-50頁。
- (53) 戴茂林、趙曉光「高崗」（『中共党史人物伝』第82巻、中央文献出版社、2002年）によれば、高崗は1932年の戦闘のさいに敵前逃亡したり、1934年1月の戦闘である地主の妾を「戦利品」にしたことがあるというから、こうしたことが罪状とされたのであろう。このほか、趙家梁、張曉霽『半截墓碑下的往事——高崗在北京』（香港、大風出版社、2008年、272-273頁）も高の敵前逃亡事件について触れている。
- (54) 会に参加して批判の矢面に立たされた劉志丹の態度については、高崗らと共に抗弁したという説（前掲戴茂林、趙曉光「高崗」）もあれば、「三甲塬事件」の時の怨みもあったので特に発言しなかったという説（前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』75頁）もある。
- (55) 閻家窪子会議の決定は「陝甘辺区特委關於陝甘辺区党的任務的決議」（中共中央書記處編『六大以来』上、人民出版社、1981年、662-666頁；前掲中共陝西省委党史研究室等編『陝甘辺革命根拠地』224-230頁）としてまとめられた。
- (56) 前掲『陝甘辺革命根拠地』232-233頁。

- (57) 前掲『郭洪濤回憶録』47頁、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』75-76頁、前掲張宏志『西北革命根拠地史』243頁。なお、『西北鬭争』に発表された郭の文章は、その一部が張秀山著に要約紹介されているだけで、全文は公表されていない。
- (58) 前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』384頁、朱理治「往事回憶」中共河南省委党史研究室編『紀念朱理治文集』中共党史出版社、2007年、443頁。『布爾什維克的生活』に掲載されたというその書簡も、全文は公表されていない。
- (59) 例えば、統一組織として発足した西北革命軍事委員会の主席のポストについては、それに劉志丹をあてるのか、謝子長をあてるのか、決着がつかなかった模様で、陝甘辺側は劉を主席と見なし、陝北側は謝を主席と見なしたようである。前掲『郭洪濤回憶録』62頁、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』385頁参照。
- (60) 1935年秋の肅清事件は非常に錯綜しており、関係者の説明も相互に出入が多い。本節の記述は、主に以下の諸資料を比較検討して整理したものである。高朗亭「西北紅軍の組建和党中央拯救西北革命根拠地史事紀実」（『陝西文史資料』第11輯、1982年）、「中央同意馮文彬、宋時輪同志關於西北紅軍歷史問題座談会的報告」（『党史資料徵集通訊』1986年第7期）、張策『三存書集』（改革出版社、1996年）、張策『我的歷史回顧』（改革出版社、1997年）、中共陝西省委党史研究室・中共甘肅省委党史研究室編『陝甘辺革命根拠地』（中共党史出版社、1997年）、戴茂林・趙曉光「高崗」（『中共党史人物伝』第82卷、中央文献出版社、2002年）、李原『只唯矣——閻紅彦上將往事追踪』（雲南人民出版社、2003年）、『郭洪濤回憶録』（中共党史出版社、2004年）、『聶洪鈞回憶与文稿』（中共党史出版社、2005年）、朱理治「往事回憶」（中共河南省委党史研究室編『紀念朱理治文集』中共党史出版社、2007年）、張秀山『我的八十五年——從西北到東北』（中共党史出版社、2007年）、宋霖・吳殿堯『朱理治伝』（中共党史出版社、2007年）、『習仲勳伝』（上、中央文献出版社、2008年）。
- (61) 各根拠地に派遣されてきた「特派員」が体现した中共「中央」の権威と地元幹部との関係、およびそれと肅清のメカニズムの関係については、福本勝清『中国共産党外伝』（蒼蒼社、1994年）、特に同書第18話「中央について——位階、起家、肅清など」が優れた政党社会学的分析を加えている。
- (62) 「中共陝北特委工作報告大綱（1934年6月27日）」（前掲中共陝西省委党史研究室等編『陝北革命根拠地』177頁）は肅反工作について、神木県だけで一年ほどの間に、百数十人（豪紳、收款員、反動分子、偵探らを含む）を殺し、大きな成果をあげたと報告していた。
- (63) ちなみに、当時前線にあった劉志丹は、劉の逮捕、取り調べ機関への移送を命じる文書を——連絡体制の不備から——偶然に目にしたが、逃げ隠れもせず、従容として自ら出頭したという美談が伝わっている（李振民、張守憲「劉志丹」『中共党史人物伝』第3卷、陝西人民出版社、1981年、219頁）。
- (64) 劉志丹らの逮捕の具体的経緯と肅清実行者の関わり、すなわち朱理治、聶洪鈞、郭洪濤、戴季英、程子華がどの程度関わっていたかは、かれら関係者の見解に不一致が多く、いわゆる「肅清事件」における最大の争点である。また、肅清で殺害された犠牲者数については、後述（注91）の「1935年の陝北肅清問題の再審査にかんする中央の決定」が200人あまりという数字を挙げて以来、多くの回想、関係著作もそれに倣うが、前掲宋霖・吳殿堯『朱理治伝』は、前掲『聶洪鈞回憶与文稿』21頁に収める聶洪鈞の批注などをもとに、その数字にはなお検討の余地があると述べている（139-140頁）。
- (65) 劉景範口述「赤安（三辺）事変」王俊義・丁東編『口述歴史』第4輯、中国社会科学出版

- 社、2006年、前掲張策『我的歷史回憶』58頁。
- (66) 毛沢東、張聞天らに肅清に関する報告をした人物については、説が分かれている。会議記録によれば、報告者は聶洪鈞だが、郭洪濤は程子華の名前を挙げる。張培森主編『張聞天年譜』中共党史出版社、2000年、272頁参照。
- (67) 中共中央文献研究室編『毛沢東伝（1893-1949）』中央文献出版社、1996年、370頁、前掲『習仲勳伝』上巻、209-213頁。
- (68) 郭洪濤「張聞天同志初到陝北」『回憶張聞天』湖南人民出版社、1985年、96頁；何方『党史筆記：從遵義會議到延安整風』香港、利文出版社、2005年、17-18頁。
- (69) 前掲『張聞天年譜』272-273頁。
- (70) 「中央常務委員会會議における張聞天の發言（1935年11月3日）」前掲『張聞天年譜』272頁。張の發言に見える「中央代表団」とは、朱理治、聶洪鈞らからなる前述のいわゆる西北代表団を指す。
- (71) 「西北中央局審査肅反工作的決定」中共中央書記處編『六大以来』下、人民出版社、1981年、372-373頁。『六大以来』の収録するこの決定の文言は、李忠全・胡民新「陝甘革命根拠地史研究綜述」（『党史通訊』1986年第3期）が引用紹介する決定のそれと若干の異同がある。あるいは、『六大以来』収録の「決定」は、事後の字句修正を経たものであるかも知れない。
- (72) 前掲宋霖・吳殿堯『朱理治伝』は、蔡子偉、黃子文、張文華、李西萍の4人が、董必武らの審議した公判で有罪を宣告され、李西萍が死刑に処されたと伝える（139頁）。
- (73) 「陝甘地域の肅清活動において戴季英、聶洪鈞両同志の犯した誤りに関する決議」の全文は、前掲宋霖・吳殿堯『朱理治伝』138頁に見える。
- (74) 李維漢『回憶与研究』中共党史資料出版社、1986年、373頁、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』89頁。ちなみに、高崗、習仲勳、張秀山、劉景範らは、いずれも釈放後に省委レベルの職に實質左遷されている。
- (75) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』113頁。
- (76) これは、周恩来が劉の死にまつわる解釈として曹瑛に語った言葉である。全文は次の通り。「志丹同志は戦場で犠牲となったが、本来かれは上級指揮官であって、敵陣に突撃するような必要はなかった。かれは汚名を雪ぎ、自分が特務とやらではないということを証明するために、むしろ進んで敵陣に突撃して果てようとしたのである。それゆえにやみくもに突撃して戦死したのだ。あの肅清運動というものがあったら、劉志丹同志も戦死するようなことはなかっただろう」（曹瑛「在延安参加整風運動和七大」『中共党史資料』第58輯、中共党史出版社、1996年）。また、劉の部下だった張秀山も、劉が出征前に「我々が果たして右派反革命かどうか、戦場でかれら〔レットルを貼った側の人間〕に見せてやろうではないか」と語ったことを回想している（前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』94頁）。
- (77) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』上巻、人民出版社・中央文献出版社、1993年、501頁。
- (78) 前掲張策『三存書集』282頁、前掲張策『我的歷史回顧』75頁。
- (79) 前掲張策『我的歷史回顧』75頁。同様の回想は、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』114-115頁にも見える。
- (80) 前掲張策『三存書集』282頁。
- (81) 前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』95-96頁、前掲張宏志『西北革命根拠地史』326頁。前掲張培森主編『張聞天年譜』542-544頁に見える2月18-20日の中央政治局常務委員会會議がその會議ではないかと推定される。



- (82) 西北局高幹会議の概況については、徐金煌「1942年10月西北局高幹会議簡介」（『中央檔案館叢刊』1987年第6期）、閻樹声、胡民新「延安整風運動中的西北局高幹會」（『人文雜誌』1992年第6期）、戴茂林「任弼時与西北局高幹會議」（任弼時生平和思想研討會組織委員會編『任弼時百周年紀念』上卷、中央文献出版社、2005年）参照。なお、徐金煌は、会議の日誌に基づき、その閉幕日を通説にいう1月14日ではなく、15日であったと述べている（徐金煌「西北局高幹會閉幕時間考証」『中央檔案館叢刊』1987年第2期）のでそれに従う。
- (83) 「西北局高幹會議」の背景をなす党中央における歴史認識の論争過程を詳細に述べることは、紙幅の関係もあり、今は割愛する。詳しくは、拙稿「1949年を跨ぐ中国共産党史上の歴史認識問題——いわゆる「西北歴史論争問題」を事例として」（『近きに在りて』第53号、2008年）、同「毛沢東与1942年的中共西北局高幹會議」（『日本東方学』第2集、中華書局、近刊）を参照されたい。
- (84) 毛沢東「整頓党的作風」（『毛沢東選集』第3巻、人民出版社、1953年、845頁）。なお、高崗失脚後の『毛沢東選集』の諸版では、この一段が「陝北の実情理解については……陝北の何人かの同志に比べるとずっと劣っている」と改められ、高崗の名前が削除されている。
- (85) 中共中央文献研究室編『任弼時年譜』中央文献出版社、2004年、424-425頁。
- (86) 章学新主編『任弼時伝（修訂本）』中央文献出版社、2000年、605頁；高新民、張樹軍『延安整風実録』浙江人民出版社、2000年、308頁。
- (87) 前掲戴茂林「任弼時与西北局高幹會議」、前掲朱理治「往事回憶」。
- (88) その情景については、前掲宋霖・吳殿堯『朱理治伝』402-415頁が当時の会議記録を引用しながら詳しく描写している。なお、毛沢東はこの会議の辺区の歴史問題にかんする討論に参加した（11月14日）だけでなく、相互に食い違ふ肅清執行者の見解を確かめるために、例えば朱理治と戴季英の対質尋問を提案したり、自らも十数回にわたる質問をするなど、この討論に積極的にかかわっている（中共中央文献研究室編『毛沢東年譜』中巻、人民出版社・中央文献出版社、1993年、412頁、前掲『朱理治伝』410-412頁）。
- (89) 高崗『辺区党的歴史問題検討』延安、中共西北局、1943年6月。この文献は、『共党問題研究』8巻7期（1982年）にも収録されている。日本語訳（部分訳）は、日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第11巻（勁草書房、1975年）に収められている。
- (90) 高崗の「辺区党的歴史問題検討」が1945年の「若干の歴史問題についての決議」と強い類似性を持ち、その原型とも言えるものであることは、つとに指摘されている。徳田教之「中国共産党における「毛沢東思想」の創出とその凝集力」（『アジア経済』12巻8号、1971年、のち徳田『毛沢東主義の政治力学』慶応通信、1977年に収録）、高華『紅太陽是怎样升起的：延安整風運動的来龍去脈』（中文大学出版社、2000年、628-630頁）参照。
- (91) 劉鳳閣等主編『紅二十六軍与陝甘辺蘇区』上、蘭州大学出版社、1995年、301-305頁。この決定の主要部分は前掲『朱理治伝』にも収められている（417-419頁）。
- (92) 同前。なお、この決定は紅25軍（およびその指導者であった程子華）の責任にも言及し、「程子華同志も、この誤った肅清において、いささかの責任を追うべきである」としている。
- (93) 前掲『郭洪濤回憶録』83-85頁。
- (94) この座談会の詳細については、前掲『朱理治伝』427-430頁、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』155-160頁、前掲『習仲勳伝』上巻、389-393頁参照。なお、李建彤が「西北歴史問題」にかかわるようになるのは、1945年のこの座談会に列席してからのようである（劉米拉等「懷念母親李建彤」『協商論壇』2006年第6期）。

- (95) 前掲張策『三存書集』285頁。
- (96) 前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追跡』21頁。功績の序列を「劉一謝一高」とする記述は、人民共和國になって最初に発表された陝北の革命史である「陝甘寧辺区簡史」（董純才編著、李卓然校閲、『党史資料』第5期、1953年）に見える。
- (97) 馬文瑞「紀念閻紅彦同志」『中共党史研究』2000年第1期。高崗の旧悪については、注53参照。なお、中共第7回大会（1945年）の中央委員の選挙のさいも、閻紅彦、呉岱峰、李仲英らは高崗には投票しなかったという（馬義「西北革命元勳——呉岱峰」『延安文学』2007年第4期）。
- (98) 閻は、小説『劉志丹』の執筆の過程で取材を受けたさい、「三甲塬事件」に関して、「劉志丹の部隊は全部が土匪だった。略奪はするわ、女はさらうわ、アヘンは吸うわで、戦う時もロバに乗せた女と一緒にだった。……劉志丹は〔三甲塬事件で〕捕らえられたが、殺されなかっただけでした」と語って取材者を哑然とさせたという（前掲邢小群『往事回聲——中国著名知識份子訪談録』102頁）。
- (99) 前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追跡』14-23頁。
- (100) 『毛沢東選集』第3巻、人民出版社、1953年、991-992、1021頁。
- (101) 同様に毛沢東による高崗への肯定的記述が削除された事例については、注84参照。なお、『毛沢東選集』第2版（1991年刊）では、この注釈は全面的に書き換えられるに到っている。
- (102) 前掲温相『高層恩怨與習仲勳』476-477頁。
- (103) 畢興等「閻紅彦」『中共党史人物伝』第28巻、陝西人民出版社、1986年、95-97頁。
- (104) 「陝北歴史と高崗問題」に関する座談会の模様については、前掲『聶洪鈞回憶与文稿』39-40頁、前掲『郭洪濤回憶録』85頁参照。
- (105) 「關於朱理治同志幾個歷史問題的審查意見」前掲『朱理治伝』430-432頁、「關於郭洪濤同志幾個歷史問題的審查意見」前掲『郭洪濤回憶録』85-88頁。
- (106) 前掲趙家梁、張曉霽『半截墓碑下的往事——高崗在北京』221-228頁。
- (107) 1970年代末から1980年代初めの『陝西文史資料』『甘肅文史資料』『革命史資料』『党史研究』などには、「西北歴史論争問題」の当事者たちの回想録が数多く含まれている。
- (108) 前掲李維漢『回憶与研究』372-373頁、宋任窮『宋任窮回憶録』解放軍出版社、2007年、513-515頁、前掲『郭洪濤回憶録』88-90頁、前掲張策『三存書集』286頁、前掲張宏志『西北革命根拠地史』326-328頁、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』355-359頁。ちなみに、双方からの出席者とは、旧陝北特委（27軍）側が郭洪濤、賀晋年、崔田民（崔天民）、李鉄輪、旧陝甘辺特委（26軍）側が張秀山、劉景範、張邦英、張策である。郭洪濤とともに肅清の主犯とされた朱理治は、1978年に死去している。
- (109) 賀晋年「在延安中央党校整風学習的回憶与体会」延安中央党校整風運動編写組編『延安中央党校的整風学習』第2集、中共中央党校出版社、1989年。
- (110) 李維漢は、1935年にそもそも肅清の見直しをした時以来、中央幹部として西北歴史論争問題に直接、間接に関わってきた人物であり、1983年にこの座談会の主宰を任されたさいには、病身であったが、この問題の解決に異常なまでの執念を見せたという（郝俊「“殘年有志惜晚晴”——記李維漢同志的晚年」『湖南党史』1996年第3期）。そして、李はこれを最後の仕事とするかのように、翌1984年に世を去っている。
- (111) 前掲張策『三存書集』286頁、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』358-359頁。
- (112) 同報告は党内文件のため、全文は公表されていないが、以下のいくつかの著作からその

一端をうかがうことができる。「中央同意馮文彬、宋時輪同志關於西北紅軍歷史問題座談会的報告」『党史資料徵集通訊』1986年第7期；中共陝西省委党史研究室編『劉志丹』陝西人民出版社、1993年、472-474頁；前掲『宋任窮回憶錄』513-515頁；前掲『郭洪濤回憶錄』88-90頁。報告は、1942年末に策定された「1935年の陝北（陝甘辺及び陝北を含む）肅清問題の再審査にかんする中央の決定」の正しさを基本的に再確認し、「劉志丹らの同志が堅持した政治路線と立場は正しいものであり、朱理治、郭洪濤の実行した路線は誤った“左”傾日和見主義路線であった」とするものだった。

- (113) 前掲中共陝西省委党史研究室編『劉志丹』473頁；本刊編輯部「党史研究中一個值得注意的問題」『党史通訊』1987年第6期。この通知も党内文件のため、全文は公表されていない。
- (114) 実は、1983年の座談会の後、さらに具体的な事項（主には、「三甲塬事件」など1930年代初めの西北紅軍の問題）についての事実認定と評価を確定するため、胡耀邦の指示を受けた馮文彬、宋時輪が1985年9月に、再度西北論争問題の関係者を召集して、座談会を開催している。座談会ののち、中共中央は馮、宋がとりまとめた報告に同意し、それを1986年5月21日に通知として党内に伝達している。中央辦公庁の名義で発せられたこの通知（中共中央辦公庁〔1986〕第103号文件）は、「今後、西北の紅軍の歴史にかんする関連問題の著述は、本報告を基準とすること」と述べている（『党史資料徵集通訊』1986年第7期）。
- (115) 例えば、1987年にいわゆる「西路軍問題」に関する論文が学術雑誌『歴史研究』に掲載されるや、ただちに猛烈な政治的圧力が加えられ、以後『歴史研究』が中共党史関連の論文を掲載しなくなるという事態が起こったが、その際にこうした歴史評価の見直しを伴う学術研究を抑止・批判する側が持ち出した論拠が、前述の中共中央の通達（中共中央〔1983〕第28号文件）であった。本刊編輯部「党史研究中一個值得注意の問題」『党史通訊』1987年第6期参照。
- (116) 前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』181-183頁；「胡耀邦同志關於創作党史題材文学作品的一個重要批示」『党史資料徵集通訊』1986年第3期。
- (117) 劉志丹紀念文集編委會編『劉志丹紀念文集』（軍事科学出版社、2003年）、中共陝西省委党史研究室等編『謝子長紀念文集』（陝西人民出版社、2005年）には、いずれも「『文集』の編集過程において、中共中央〔1983〕第28号文件、中共中央辦公庁〔1986〕第103号文件……に基づいて、原稿の重要な史実については、重大な事件、戦役、戦闘の背景、時間、人名、地名、戦果、および評価などをふくめて、一部の原稿には内容の削除と表題の手直しを行った」という「後記」がつけられている。
- (118) 前掲『郭洪濤回憶錄』80頁。
- (119) 前掲『三存書集』、『我的歷史回顧』。
- (120) 前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』（李原は閻紅彦の秘書を務めた人物）、前掲『聶洪鈞回憶与文稿』（聶の子女が遺稿を整理したもの）、前掲張秀山『我的八十五年——從西北到東北』（張の子息が遺稿を整理したもの）、前掲『朱理治伝』（子息の朱佳木——陳雲の秘書を務めたことがある——が協力）、前掲『黄土高天拳紅旗——吳岱峰回憶錄』（私家版で発行）、何家棟「又有人說《劉志丹》」（『粵海風』2003年第5期、何は工人出版社で『劉志丹』の編集を担当した人物）などを挙げるができる。言うまでもなく、李建彤の死後に刊行された『反党小説《劉志丹》案実録』もそうした「真相」解明を目指したものである。一方、薄一波『若干重大決策与事件的回顧』も、初版（中共中央党校出版社、1993年）では、小説『劉志丹』事件に言及する（1095-1097頁）が、修訂版（人民出版社、1997年）では、閻紅彦

の関与に関する部分が削除され、小説『劉志丹』についての評価も低くする修正が加えられている（1130-1131頁）。もって、西北歴史問題とそれに関連する『劉志丹』事件の処理がなお微妙な問題をはらんでいることがうかがわれよう。

- (121) 林和立「習近平応果断平反党内冤案」史鑒編『高崗「反党」真相』香港文化芸術出版社、2008年、293-295頁。
- (122) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』44頁には、下巻にあたる部分の原稿（第三稿か第四稿）の写真が掲載されており、原稿そのものがすでに完成していたことはほぼ確かである。
- (123) 『中国青年』（1962年第15、16期合刊）が小説「劉志丹」の部分掲載を行ったさいにつけた「《劉志丹》上巻内容紹介」（文君）は、上下二巻からなる『劉志丹』の上巻は間もなく出版される見込みだが、下巻はなお執筆中であると述べている。また、中共8期10中全会で審査されたのも、上巻見本本だけだったようである。
- (124) 同前。
- (125) 詹玲「論《劉志丹》——一部命運坎坷の小説」『文学評論』2007年第1期。
- (126) 念のために『工人日報』などに掲載されたものと1979年版（上巻）の対照関係を示すと次のようになる。『工人日報』（7月28日掲載分—上巻133-148頁、7月29日—149-158頁、7月31日—158-171頁、8月2日—171-192頁、8月3日—192-204頁、8月4日—204-222頁）、『光明日報』（8月2日掲載分—上巻111-116頁、8月7日—上巻123-130頁）、『中国青年』（1962年第15、16期合刊—上巻133-148頁）。報刊連載分と工人出版社版の異同については、阪口直樹『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』（東方書店、2004年、350-352頁）が具体的に検討しているが、阪口氏がこれを執筆した当時には、工人出版社版の下巻が刊行されたか否かも判然とせず、また新版も第1、2巻しか入手できなかったようで、新版についての検討は部分的にしかなされていない。
- (127) 李建彤「劉志丹」『人民文学』1979年第2期。なお、『人民文学』に掲載されたのは、工人出版社版（上巻）でいうと、303-357頁に相当する部分である。
- (128) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』238頁。
- (129) 同前238-241頁。
- (130) 同前241頁。新版『劉志丹』第1巻の末尾（587頁）には「1983年8月8日於北京修改完」の文字があるが、第2、3巻には脱稿時期を示す記載はない。
- (131) 「從吳運鐸到《劉志丹》——何家棟訪談」邢小群『往事回聲——中国著名知識份子訪談録』香港、時代国際出版、2005年、112頁。
- (132) 李建彤は小説新版の執筆は、おのれの歴史的使命を果たしたまでであり、かつて延安で12年間も飯を食わせてもらったことへの恩返しであると述べている（前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』241頁）。
- (133) 李建彤『劉志丹』第1巻、文化芸術出版社、1984年、1-3頁。
- (134) 同前3頁。
- (135) 同前2頁。
- (136) 前掲「從吳運鐸到《劉志丹》——何家棟訪談」112頁。
- (137) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』27頁。なお、「三甲塬事件」に関する劉景範の回想は、省委からやって来た「高崗は三嘉原〔三甲塬〕に着くと、志丹を釈放した」と述べている（「劉景範1983年5月16日談陝甘辺早期革命武装闘争」前掲『紅二十六軍与陝甘辺

- 蘇区』上、317頁)。
- (138) 李建彤によれば、1962年の小説での「羅炎」の登場回数は7回に過ぎず、またその「羅炎」も、必ずしも高崗を仮託したものではなかったのに、「罪証」の最たるものにされたのだという(前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』26-29頁)。
- (139) 蔡子偉については、注72参照。かれの伝記や年譜を収めた『蔡子偉紀念文集』(李易方主編、中国農業出版社、1999年)がある。
- (140) 謝子長を「白衣秀才”王倫”と呼ぶことは、1945年の「西北歴史問題座談会」でも見られたという(前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』83頁)から、李建彤は小説の中で、それを登場人物に語らせたということになる。
- (141) 新版第2巻の王兆平、郭保権の恋愛をめぐる描写については、前掲阪口直樹『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』が具体的に検討しており(346-348頁)、参考になる。
- (142) 文革前後の李と劉の別離と再会については、前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』が詳しく述べている。
- (143) 史秀雲は早くに亡くなったが、尤祥齋は後年、小説『劉志丹』事件が起こると、関係者を迫害する側に回ったため、李建彤はかなりの怨みを抱いている(同前59-60頁)。
- (144) 同前6頁。
- (145) 例えば、李建彤が文革中の体験で知るに至った呉岱峰の二面性(同前90-91頁)は、小説新版第3巻523頁で戴鴻遠の二面性に反映されているようである。
- (146) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』は、朱理治について、誤りを認めるのに躊躇のない誠実な人であったと述べて、聶洪鈞とともに好意的な紹介をしている(63-64頁)。
- (147) 張軍孝等「楊森」『中共党史人物伝』第39巻、陝西人民出版社、1988年、152-153頁。一方、閻紅彦の伝や同志の回想によれば、最後まで渡河点を死守した閻は、30軍の渡河を見届けた後、ようやく自らも河を渡ったことになっている(畢興等「閻紅彦」『中共党史人物伝』第28巻、陝西人民出版社、1986年、92-93頁；杜平等「紅三十軍与閻紅彦同志」『光明磊落耿直剛強——閻紅彦紀念文集』雲南人民出版社、1987年、185-188頁)が、それら資料には楊森にかんする言及はない。
- (148) 夷叔「十年大慶、餓殍千里」『開放』1994年8月号、王若望「高崗饒漱石劉志丹之死——揭開「政治謀殺」之謎」『伝記文学』65巻6期、1994年。ちなみに、筆者は2007年秋に陝西北部のいくつかの革命記念館を参観したさい、館の職員から幾度となくこの説を聞かされた。かれらは、劉志丹だけでなく、楊森、楊琪といった劉の部下たちが、ほぼ同じ時期に相次いで命を落としているのは偶然ではないと言うのである。
- (149) 劉明綱「劉志丹之死」『文史天地』2007年第2期、姚文婁「劉志丹將軍犧牲之實証」(前掲『建国以来劉志丹研究文集』所収)。
- (150) 前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』182頁、前掲邢小群『往事回聲——中国著名知識份子訪談録』125頁。
- (151) 1983年の通達に関しては、注112、113参照。
- (152) 前掲李原『只唯実——閻紅彦上将往事追踪』182頁。小説の中でも、特に第3巻の描写が大きな問題にされたという(劉米拉等「懷念母親李建彤」『協商論壇』2006年第6期)。
- (153) 前掲邢小群『往事回聲——中国著名知識份子訪談録』125頁。
- (154) 「胡耀邦同志關於創作党史題材文学作品的一個重要批示」『党史資料徵集通訊』1986年第3期。

- (155) 例えば、范碩「評《“二月逆流”紀実》的真實性」(『文芸争鳴』1986年第6期)、石玉山「漫議伝記文学的真實性——兼評当前伝記文学写作中的問題」(『文芸理論与批評』1989年第2期)などは、いずれもこの批示を根拠に、一部の作品を批判している。
- (156) 前掲李建彤『反党小説《劉志丹》案実録』241頁。
- (157) 詹玲「論《劉志丹》——一部命運坎坷的小説」(『文学評論』2007年第1期)。
- (158) 新版『劉志丹』第1卷、3頁。